

はじめに

日本はジェンダー平等な社会の実現に対して、前進と後退の間を揺れ動いている。1985年に成立した男女雇用機会均等法をはじめ、男女平等な社会を実現するための法制度が徐々に整ってきた。1999年に施行された男女共同参画社会基本法は、職場のみならず家庭や地域社会においても、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分業を解きほぐし、性別にかかわらず個人個人を尊重する社会の実現を目指している。女性の社会進出が進む一方、ここ数年では「イクメン」、「家事の分担」といった言葉も一般的になり、男性の家庭進出を促す動きも見られるようになった。

しかしながら、日本にはまだまだ男女格差が大きく存在している。例えば、世界経済フォーラムによる男女平等指数をみると、日本は142カ国中104位（2014）である。2013年の105位より順位を一つ上げたとは言え、まだまだかなり低い。98位（2011）、101位（2012）と続いていた後退に、ようやく歯止めがかかったに過ぎない。一向に順位が上がらない主な原因として挙げられているのは、依然として変化することのない性別役割分業観である。

固定的な性別役割分業観と密接に結びついているのが、日本の結婚のあり方である。夫は「稼ぎ手」「養う者」であり、妻は「家庭の守り手」「養われる者」というロールモデルはいまだに強固である。かつての絶対的な結婚から個人の選択としての結婚が認められるようになり、未婚化・晩婚化が進んだにもかかわらず、結婚制度そのものは否定されることなく、性別役割分業にも大きな変化はない（島 2012）。

このような背景を踏まえ、本研究では女性たちの結婚における性別役割分業に対する意識を探り、従来の結婚のあり方に変化を求めているのか否かを探りたい。従来の結婚のあり方、つまり「夫は仕事、妻は家庭」が根強く維持されている要因の一つとして、女性たちの支持があると推測される。本研究は既婚女性にインタビュー調査を行い、固定的な役割分業観に基づく結婚が維持されていく要因を女性たちの語りの中から見出していくことを目的としている。

以下、まずは第1章で結婚において依然として残る性別役割分業の問題点を先行研究から整理する。第2章では調査方法および調査対象について述べる。第3章では、調査結果としてインタビューで得られた女性たちの語りを三つのテーマ別に示した後、考察を加える。三つのテーマとは、第一に夫婦間の性別役割分業に対してどう思っているのか、第二に結婚して良かった点と悪かった点とは何か、第三に対等な夫婦関係であることを望むかである。第4章では、ケーススタディとして調査対象者の中から典型的な事例を抜き出し、個別のストーリーに近づいてみる。第5章は全体のまとめの章として、女性自らが従来の結婚のあり方をどう意識しているか考察し、性別役割分業解消の可能性を探る。

第1章 結婚における性別役割分業に関する問題点の整理

戦後の高度経済成長期に都市部から広まった「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業に基づく夫婦のあり方は、結婚と同時に女性たちを生産労働から解き放つとして、女性たちの憧れの対象となった。家事・育児に専念する主婦というステイタスは既婚女性の誇りであった。「企業戦士」を家庭で支える妻のあり方が理想となり、また妻の無業は夫の稼ぎが充分であることを示すとして、喜ばしいこととなった。

ところが、1980年代、結婚は女性に不幸をもたらすものという捉え方が登場した。『家庭内離婚』（林 1985）、『主婦症候群』（円 1982）等といった、不幸な結婚生活を嘆きながらも、そこから逃げ出すことができない女性たちの嘆きを描いた本がベストセラーになり、「女性の自立」が叫ばれるようになった。家事育児への専念は、当然ながら夫に対する全面的な経済的依存を意味する。「雇い主」である夫の意に沿うことに抵抗がない妻であれば問題はないが、そうでない場合であっても、経済的に自立ができない妻には夫に従うという選択しか残らない。落合（1994）は「家族の戦後体制」の変容を論じる中で、主婦という生き方には夫が「死なない」、「失業しない」、「離婚しない」という三条件が必要であると述べ（落合 1994: 248-250）、結婚制度が生み出す女性の夫への依存というリスクを指摘している。夫が妻を経済力と権力で支配する家父長制的な結婚のあり方からいかに脱却するのかという問いは、性別役割研究¹から始まった日本の女性学が取り上げ続けている課題の一つである（井上 2009: 3）。

経済的な問題以外の弊害も指摘されている。松田（2000）は、現代日本の夫婦における家庭内の役割分業は、「男性の抑圧」、「夫婦間のコミュニケーション不全」という歪みを引き起こすとしている。夫の役目は経済的責任を果たすこと（のみ）という結婚のあり方は、男性の長時間労働を当然とし、家庭からの疎外を引き起こす。果ては過労死や過労自殺という社会病理まで起きてしまう。また、夫と妻の役割が歴然としている性別役割分業型の夫婦は、それぞれの役割が決まっているのでコミュニケーションも必要とされず、夫婦関係の希薄化に拍車をかけるとしている（松田 2000: 141-144）。

固定的な男女の性別役割分業を前提とした結婚について、さらに婚姻制度や社会保障、母性主義、夫婦の対等性と関連した問題点を以下に述べる。

第1節 法的制度としての結婚の問題点

海外では子どもを持つことと結婚をすることは必ずしもリンクしておらず、別物として捉えられている国々もあるが、日本社会においては今なお、子どもを持つには法的婚姻が前提となっている。このことは例えば、少子化の要因と解決策を探るための調査において、

「女性の仕事、子育てと結婚時期の選択」や「未婚女性の結婚観と子育て観」などのように、少子化という子どもをテーマとしたものであるのに、そこに当然のように「結婚」が出て来ている点からもうかがえる（少子化の社会・心理的要因に関する調査研究会 1997 参照）。本来、生殖行為の結果である出産と、社会制度としての婚姻はまったく別物であるが、子どもについて語られるとき、「結婚」は欠かせないファクターとなっているのである。

岩志（2010）によれば、種の再生産という生物的な保存本能に各種の要素を加味して社会制度として作り上げたのが婚姻制度である。現在の民法の基礎となった明治 31 年民法の婚姻制度は、当事者同士のみの自由意思によって婚姻が成立するとしている点で、極めて近代的であると言えるが、実際には「家」制度と結びついており、婚姻の自由や両性の平等が保障されていたとは言い難い。戦後、追跡制度の廃止に伴い、婚姻法も書き換えられたが、ここで法律婚主義が確認されることとなる（岩志 2010：22）。婚姻が法律行為である以上、幾つかの法律効果が発生するが「中でも、夫婦同氏については、婚姻の届出の際に届書に婚姻後の夫婦の氏を記載する必要がある、これを記載しなければ届出そのものが受理されないため、実質的に婚姻の成立要件と同じような機能を果たすものとなっている」（岩志 2010：27）のである。法律上は男女いずれの姓を選択しても良いことになっているが、家制度の名残により、多くは女性が改姓することから「自己の氏の変更によって生ずる不利益は事実上女性に押しつけられているのであり、そのような中で同氏を強制することは、妻は家庭にという考え方を助長し、ひいては個人としての女性の社会活動の妨げとなりかねない」（岩志 2010：27）のである。岩志はさらに、法律婚主義の弊害として、非婚カップルの排除、その子どもを正当ならざる子として扱う法律上の差別主義、女性のみ課されるもはや合理性を欠いた再婚禁止期間、同性愛カップルの排除を指摘している（岩志 2010：24-25）。

非婚に着目すると、善積（1997）は、夫婦別姓や自由な生き方を支持する人の中にすら、「人々を婚姻制度の枠内に入れようとする潜在的な意識が存在する」と指摘して、婚姻届は出さなければならないものであるという道德観に多くの人々が縛られていると言う（善積 1997：13）。日本は法律婚主義であり、夫婦を社会の基礎単位であるとしていることから生ずる差別は多岐にわたる。戸籍制度に関連する差別、認知制度に関連する差別、ビザの取得の際に出会う障害、税金制度や社会保障制度上の差別などが挙げられる。さらに善積によれば、こうした法律上の差別のみならず、日常の社会生活における障害として、非婚カップルが生命保険に加入する際の困難さや、入居や住宅ローンなどの公的書類では夫婦として扱われないことなどを挙げている（善積 1997：250）。

善積は、「性別役割分業を前提にした法律婚単位の日本の社会では、法律婚家族の維持のために非婚の母や婚外子は差別され、妻の経済的自立の権利も保障されない」（善積 1997：288）とし、法律婚に寄らないパートナーシップや家族の広がりこそが男女平等な社会の実現につながるのではないかと訴えている。

第2節 性別役割分業と社会保障

戦後、急速な産業化の中で若年単身者が大量に都会へと流入していく。このことによって、若者は親の介入から自由になり、結婚への「家」の介入も希薄化する。高度経済成長期に男性労働者の収入は右肩上がりとなり、一方女性は、若いうちの数年を「職場の華」として過ごした後、そうした男性と結婚することで労働市場からは退き、主婦となる。こうして性別役割分業を前提とした近代家族が普及していった。

永井（2007）によれば、有配偶女性の大半が何らかの形で働いているにもかかわらず、1960年代以降、共働きは一時期、家族病理として扱われていた。現在でも、夫婦もしくは家族の安定性は、稼ぎ手である夫と専業主婦の妻によってもたらされるものであり、性別役割分業が本来的なあるべき家族像であるとする意識が根強い。このことから、女性の労働は周辺化され、家事・育児・介護が女性のみ義務となっていくのである（永井 2007：138）。

こうした性別役割分業による近代家族体制について、瀬地山（2010）は社会保障制度に着目して批判している。つまり、日本の社会保障制度には各種の配偶者控除／配偶者優遇措置があるため、実質的には「103万円の壁」を越えた共働き世帯から、専業主婦世帯（パートも含む）へと莫大な所得移転が行われていると言うのである。そして、夫の所得が上がる程、妻の就業率が下がることから、専業主婦は「豊かな男性のみが購入できる『商品』になっている」として、そのような恵まれた層に向けて、「わざわざ控除という形で税金を還元して『補助金』を出す」のは、社会政策の観点から疑問であるとする（瀬地山 2010：13-14）。

現代は、女性の社会進出が肯定されているかのように見えるが、社会の構造は厳然として男性が主たる稼ぎ手であり、男性中心の産業構造である。社会政策もそれを前提としており、女性は社会人としては一人前と見なされない。したがって、一人前として自立できなくても許されるという側面がある（目黒 2000：14）。こうした性役割は女性にのみ不利益をもたらすものではなく、ひとり稼ぎ手であるといった重圧から過労自殺に至ることを考えれば、男性の命にも関わる問題であるとして、性役割が男性にとっても望ましくないものであることを指摘している（目黒 2000：18-19）。

社会保障制度の基礎単位を夫婦とすることについては、他の論者からも批判がある。例えば、浅野（2010）は「未婚」という言葉こそが、人はいずれ結婚すべきものであり、しないのは異常で不自然であるという日本の価値観を如実に表していると指摘している（浅野 2010：30）。その上で、日本のセイフティネット・システムが、人は皆結婚し家族をつくるということを前提とした、世帯単位のものである以上、生活の安定を得たいと願う女性が結婚に救いを求めるのは当然の帰結であるとしている（浅野 2010：36）。

第3節 性別役割分業を強化する母性主義

瀬地山（2010）によれば、日本の恋愛結婚は高度経済成長期に性別役割分担を伴いながら普及した。明治以前の日本においては、結婚に「恋愛」の入る余地はなかった。その結果、日本では、家族愛ではなく母性愛のみが強調されていくことになる。

日本型の近代家族は別の特徴を帯びることになる。近代家族は情緒の要素としては、夫婦愛と子どもへの愛情の1つを持っていたが、そのうち夫婦愛が希薄になった分だけ、母親の情緒的エネルギーは子どもへと注がれる。日本の家族関係の1つの特徴とされる母性主義である。

（瀬地山 2010：11）

こうした日本の母性主義について、香山（2010）は女性雑誌の影響力を挙げている。近年、女性誌は結婚こそが女性の幸せであるという特集を盛んに組み、子どもを持つてはじめてわかることがある、と結婚・出産・育児の素晴らしさを繰り返し説いている。そして、今では女性のロールモデルは夫と子どもを得ていることになっていると言う（香山 2010：90）。女性誌の影響については、直井（2000）も育児雑誌の多くが、女性のみを対象としていること、すなわち育児の担当者は母親であると言っていることを指摘している。それらは子育てをするにあたり、必要な情報である反面、母親のみが育児の責任者であり、その義務を果たせる女性のみが「よい母親」であるというメッセージを繰り返し注入することになると指摘する（直井 2000：127）。

江原（2000）によれば、現代の（とりわけ若い）女性たちは「自分の生き方も大切にしたい」という考え方を強く持っている。しかし一方で同時に子どもが幼いうちは母親が子育てをした方がよいとも思っている（江原 2000：29）。江原はこの「子どもが幼いうちは母親が育てた方がよい」という言説に注目し、すでにこの三歳児神話に合理的な根拠がないにもかかわらず、今なお強固であるのはなぜかを分析している。この言説は単純に解釈すれば「子どもにとってよい」と受け取れるが、根強く主張される背景には、母親ではない人からも支持されていることを挙げて「母親に子育ての責任を負わせておいたほうが自分にとって都合がよい」という意味合いが含まれていると指摘している。男性の場合は、自らを子育ての責任から除外することができるからであるという（江原 2000：39-40）。そして、母親自身が母子の一体感を「幸せな家庭」と同一視する（矢澤 2000：186）ことによって、母性主義は女性の行動を規制する規範として機能するのである。

第4節 夫婦の対等性と性別役割分業

夫婦の対等性について、水落（2007）は妻の家事分担と家計貢献の観点から分析している。日本は徐々に稼ぎ手である夫と専業主婦の妻というモデルから共働社会へと移行してきているが、水落によれば、共働社会の進展によって、妻の家事負担が減少するとすれば、一方で家計貢献が求められることになると指摘し、女性の平均賃金が男性よりも低いことを考えれば、家計貢献への負担は女性にとってはより大きなものとなるとする。そのため、現状の夫婦関係のまま共働社会が進行することは、必ずしも夫婦間の対等性をもたらすとは限らないと分析している（水落 2007：59）。

また、性別役割分業と夫のストレスに着目した研究では、男性の多くが「家族を経済的に養うのは男性の役割である」という男性の稼ぎ手役割を支持しているため、一家の稼ぎ手としての自らのポジションが危うくなると感じたとき、妻の収入の増加は、夫のディストレスに否定的に作用する可能性があるとしている（斐 2007：75）。

何をもって夫婦の対等性とするかは様々であり、家事・育児・賃金労働を夫婦で等分に分担することが平等であるとする考え方もあれば、男女はそれぞれ特性が違うのであるから、それぞれの能力を活かし、男性は賃金労働を、女性は家庭内労働を通じて家庭に貢献することが平等であるとする考え方もあると踏まえた上で、なお竹内（2007）は経済的な平等性のない性別役割分業で対等な夫婦関係が実現できるか疑問視している。「情緒的なサポートを提供するのが妻に偏っているのは、夫婦間に社会的・経済的格差があるため」であり、「夫が妻に対して権力をもっているのも、男性優位の文化的・経済的原資の作用」だからである（竹内 2007：90）。また同時に、単に妻の経済力が高まれば夫婦の対等性も高まり、結婚満足が高まるというものではなく、互いに相手をどう評価するかにかかっていると指摘している（竹内 2007：92）。

妻の就業が必ずしも夫婦の対等性と直結しない点については、永井（2007）も指摘している。妻が就業していても、現実的には夫の家事参加量は大きく増加しないため、結果的にはむしろ妻の負担が増えることもある。また、女性の労働は周辺的な位置づけであり平均賃金も低く、社会的な評価が低いことから、家庭内でも実際の家計貢献よりも低く見積もられがちである（永井 2007：140）。では、収入が高ければ対等になるかと言えば、妻が夫と同等（以上）の収入を得ている場合、その後ろめたさから家事・育児を担当するという現象も見られる（永井 2007：140）。さらに、家庭内の安定・安寧はひとえに女性の責任とされる社会にあつては、性別役割分業に肯定的な働く妻は家事をすべて負担することで働いている罪悪感を払拭しようとし、一方で、否定的な妻も、夫に家事・育児を要求することから来る摩擦を避けるため、夫よりも多く負担する傾向がある。そして、家族の結びつきを強化・維持するのは女性であると、女性自らが思っているため、就業をしていても、家庭ではセカンド・シフトにつくのである。つまり、共働きであったとしても、女性がより多く家事・育児を負担する仕組みが出来ているのである（永井 2007：140）。現代社会は多様な選択肢があるかのように見えるが、女性は仮に働いていたとしても男性の

ような「稼ぎ手」という位置づけはされず、また男性は家事や育児を負担していたとしても女性の「手伝い」に過ぎないのである（目黒・矢澤 2000：6）。

第5節 変わらない夫婦間の性別役割分業

上記のように様々な問題が指摘されながらも、男女の性別役割分業を前提とした日本の結婚や夫婦のあり方は、1980年代以降あまり変わっていない。また、そういった問題点が、広く一般に共有されているとは言い難い。松田（2013）によると、出産後に就業継続する女性は増えていないし、夫の家事・育児参加も進んでいない。少なくとも育児期においては、固定的な性別役割分業を行っている夫婦は圧倒的に多数である。近年、女性の年齢階級別就業率を示すM字型カーブの底が上がっている原因は就業継続する女性の増加ではなく、未婚者の増加である。要するに、「夫は仕事、妻は家庭」という従来の夫婦のあり方は、ほとんど揺らいでいないと指摘している（松田 2013：35-36）。また、1994年と2005年に行われた「家庭教育についての国際比較調査」の結果から、その10年の間に日本では子育てに参加する父親の割合が低いままほぼ変化していないという結果を受け、牧野（2010）は、「どうすれば日本の男女の役割分担は変化するのでしょうか。前途多難であることがわかります」（牧野 2010：35）と嘆いている。

今まで見てきたように、夫婦間の役割分業意識が維持されている要因は男性側だけにあるのではなく、女性もそういった価値観を内面化している。国立社会保障・人口問題研究所が2013年に実施した「第5回全国家庭動向調査」の結果によると、夫と妻の家事分担割合の平均は、妻85.1%に対して夫14.9%であり、妻の負担割合が圧倒的に多い（国立社会保障・人口問題研究所 2014：16）。しかし、夫の家事に対する妻の期待については、「期待する」は31.4%に過ぎず、他方「期待しない」は68.6%と高い（国立社会保障・人口問題研究所 2014：22）。「期待してもどうせ夫はやらない」という諦めも含まれている可能性があるが、妻自らが率先して自分の役割として家事をこなしている現状を反映しているのではないか。例えば、首都圏30km圏在住で末子が12歳以下の妻を対象にした調査を行った中川は、夫の家事育児参加が進まないのは夫側にばかり原因があるのではなく、妻が強い家庭責任意識を持って育児・家事を行うことで夫の参加を制約しているという妻側の原因も指摘している（中川 2010：210-211）。

第2章 調査について

結婚制度については既に様々な問題が指摘されていながらも、今なお社会システムの基盤として支持され続けている。従来の結婚のあり方、つまり「夫は仕事、妻は家庭」が根強く維持されている要因の一つとして、女性たち自身による性別役割分業の支持があるのではないだろうか。このような問題意識を背景として、性別役割分業構造が解体に向かわない要因を探るため、本研究では既婚女性たちの性別役割分業に対する意識を探り、従来の結婚のあり方に変化を求めているのか否かを調査した。

第1節 調査方法

本研究では、女性たちの結婚における性別役割分業に関する意識を探るため、機縁法による半構造化ライフストーリー・インタビューという質的調査を用いた。その理由は、既婚者を対象とした結婚をめぐる問いは、極めて私的な領域へと踏み込む調査となるため、女性たちの真意を聞き出すには対面での聞き取りが最も有効であると判断したからである。基本的な情報を得るために半構造化インタビュー法を用い、結婚の経緯について／結婚前の理想と結婚後の現実／結婚して良かったことと我慢していること／対等な夫婦関係について、の各項目を軸に話を聞いていった。なお、調査項目については巻末に資料として付した。

インタビューの実際的手法としては、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、語り手と聴き手の間で自由な会話が行われ、「何を語ったのか」だけでなく「いかに語ったのか」にも注意を払うアプローチであるライフストーリー・インタビューを実施した²。ライフストーリーの語りは語り手に予め保持されていたものの表出ではなく、語り手と聞き手の相互行為を通して構築されるものである。つまり、ライフストーリーは価値観や動機によって意味構成された主観的なリアリティと言える³。実査は、個人的心情を含む深層部を引き出すための配慮から、調査対象者1人に対してインタビュアー1人の対面形式で実施し、1人の聞き取りに当たり約1～2時間をかけて行った。結婚という体験をめぐるイメージ、感覚、感情、欲望などによって構成された主観的なリアリティこそ筆者らが関心をもつものであり、量的調査では表れにくく、また語り手にとって他人には話し難い語りをすくい取り読み解いて、女性たちの結婚についての意識を明らかにしたい。

第2節 調査対象

調査対象としてはある程度の婚姻年数を経ていることが必要と考え、年齢は30歳前後

から 60 歳前後までとした。また、本調査では、都市部と地方の結婚観に差はあるのか、あるとしたらそれはどのようなものなのかを探るため、東京と九州地方(北九州市・熊本市)に協力者を募った。九州地方を選択した理由は、一般に九州はジェンダー規範意識、男尊女卑意識が根強いとされていること、また、他地域に比べて九州地方には多くの結婚情報誌が発行されていることから、「結婚に積極的な土地柄」であると仮定したからである。東京と九州を合わせて 40 名の調査協力者を得て、東京調査は 2013 年 10 月から 2014 年 4 月にかけて、熊本調査は 2014 年 2 月から 3 月にかけて、北九州調査は同年 3 月に実施した。調査協力者の概要は表 1 にまとめた。

表 1 調査協力者一覧 (データは調査時のもの)

東京調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	東京調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
東 A	30代	専門職	自営業の専従	専門学校卒	2人	東 H	40代	会社員	専門職(パート)	大学院卒	1人
東 B	30代	会社員	無職	大卒	3人	東 I	50代	会社員	無職	専門学校卒	6人
東 C	30代	専門職	専門職(パート)	大卒	3人	東 J	50代	会社員	派遣社員	高卒	2人
東 D	30代	会社員	専門職	大卒	1人	東 K	50代	団体職員	無職	大卒	2人
東 E	40代	医療専門職	医療専門職	専門学校卒	2人	東 L	50代	会社員	パートタイマー	大卒	2人
東 F	40代	不明	医療事務職	専門学校卒	1人	東 M	50代	アルバイト	無職	大卒	2人
東 G	40代	不明	医療事務職	短大卒	2人	東 N	60代	自営業	自営業	大卒	2人
熊本調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	熊本調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
熊 A	30代	会社員	自営業	専門学校卒	1人	熊 G	40代	会社員	会社役員	短大卒	1人
熊 B	30代	会社員	自営業	高卒	3人	熊 H	40代	会社員	無職	短大卒	3人
熊 C	30代	会社員	無職	大卒	1人	熊 I	40代	会社員	無職	短大卒	2人
熊 D	30代	自営業	自営業	大卒	1人	熊 J	40代	会社員	自営業	短大卒	3人
熊 E	30代	医療事務職	講師	専門学校卒	3人	熊 K	40代	医療専門職	福祉専門職	短大卒	2人
熊 F	30代	専門職	専門職	大卒	1人	熊 L	50代	会社員	講師	短大卒	2人
北九州調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供	北九州調査	年齢	職業(結婚前)	職業(現在)	学歴	子供
北 A	20代	専門職	専門職(パート)	短大卒	なし	北 H	40代	会社員	専門職(パート)	短大卒	2人
北 B	30代	会社員	専門職	短大卒	1人	北 I	40代	会社員	団体職員(パート)	高卒	3人
北 C	30代	学生	会社員	大学院卒	なし	北 J	50代	自営業手伝い	団体職員(パート)	高卒	2人
北 D	30代	アルバイト	専門職	短大卒	2人	北 K	50代	会社員	アルバイト	大卒	2人
北 E	30代	会社員	会社員	大卒	1人	北 L	50代	会社員	無職	短大卒	2人
北 F	40代	会社員	実家家業の手伝い	大卒	1人	北 M	50代	会社員	団体職員	高卒	2人
北 G	40代	アルバイト	団体職員(パート)	専門学校卒	4人	北 N	60代	教師	公務員	大卒	5人

(出典) 筆者作成

対象者の年齢は 20 代 1 名、30 代 14 名、40 代 13 名、50 代 10 名、60 代 2 名で、30 代、40 代、50 代が中心となった。地域別では、東京都 14 名(30 代 4 名、40 代 4 名、50 代 5 名、60 代 1 名)、熊本市近辺 12 名(30 代 6 名、40 代 5 名、50 代 1 名)、北九州市近辺 14 名(20 代 1 名、30 代 4 名、40 代 4 名、50 代 4 名、60 代 1 名)だった。

学歴は高卒 5 名、専門学校卒 7 名、短大卒 12 名、大学卒 14 名、大学院卒 2 名であり、

比較的高学歴者が多い結果になった。

結婚前の就業状況は、不明の2名、学生1名を除き、40人中37名が就業しており、うち自営業と家業の専従の3名を除く34名が雇用者で、うち把握できた正規雇用者が19名だった。対して現在の就業状況は、無職の8名を除くと、32名がなんらかの形で就業していたが、結婚前と比較して「会社員」が大きく減少している。

子どもについては、調査協力者40名のうち38名は子どもを持つ女性であり、母親としての役割を持っていた。子どものいない女性は2名のみであった。

また、調査協力者の結婚をめぐる状況については、表2にまとめた。今回の調査協力者40名中では離婚後再婚していない者が4名、別居中の者が1名おり、さらにその中では再婚を否定していない者が3名、再婚を否定するとともに結婚そのものにも否定的な考えを持つ者は2名である。したがって、この2名を除くと、今回の回答者は離婚経験者を含めても結婚を比較的肯定的に捉えていると言えるだろう。

表2 調査協力者の結婚をめぐる状況（全40名）

初婚	離婚後再婚	死別	離婚（4名）・別居（1名）	
32名	1名	2名	再婚に肯定的	結婚に否定的
			3名	2名

（出典）筆者作成

第3章 調査結果

本章では、インタビュー調査で得られた女性たちの語りを三つのテーマに分け、その傾向を探った。第1節では夫婦間の性別役割分業に対してどう思っているのか、第2節では結婚して良かった点と悪かった点とは何か、第3節では対等な夫婦関係であることを望むか、という問いに対する答えを提示し、第4節の小括では女性自らが結婚のあり方をどう意識しているか考察する。

また、インタビューからの語りの引用文において、（ ）は調査者による補足を示し、【 】は調査者の発言を示している。

第1節 夫婦間の性別役割分業への意識

女性たちの語りから、本調査の主目的である夫婦間の性別役割分業に対する意識を明らかにしたい。ここでは、「結婚前に描いていた理想の夫婦関係・役割分担はどうだったか」、そして「結婚後、実際の夫婦関係・役割分担はどうなっているか」という問いのうち、性別役割分業に関連する語りを抽出し、結婚前と結婚後の意識の変化を分析した。

1. 結婚前の意識

まず、結婚前の意識についての語りを見てみよう。彼女たちの語りから、多くの女性たちが特に明確なプランがあって結婚しているわけではないという様子がわかる。

二人でいたいから。二人で住みたい。どちらも実家だったので、二人で住むには結婚しなかった。結婚が目的ではなく二人でいることが目的だった。親からは（若かったので）反対された、もっと他の人と付き合ってからにしてはどうかって。でも互いに相手しか見えず燃え上がって。（東 F）

その頃は結婚をしないという選択肢はなかった。24 までにしなければならなかった。それ以上遅いと不思議な感じ。勿論何人かいたけど、（そういう人とは）同じ日本でも世界が違う感じだった。そういう時代だった。漠然と結婚はする（ものだった）。（東 G）

弟が早く結婚したんですよね。その結婚が決まったと言われたのが、お正月にみんな集まったときで、これはやばいと思って、もう後がないから。会社の周りにももういないし、で、結婚相談所に駆け込み、早く結婚したいと思った。やっぱりする人はだいたい 30 前にしてるから。してないと、会社にもお局さんの 35 過ぎとかの方々もいらっしやって、ああはなりたくないなと思ったりしていましたね。（東 H）

子どもが欲しかったですよね。産婦人科に勤めてたんですよ。毎日赤ちゃん見てて、かわいかね～って。これが自分の子ならもっとかわいかねって。子ども欲しいんだけど、っていう話をして結婚迫ったみたいなの。(熊 E)

その頃、何となく自分の中で24ぐらいで結婚したいというのが若い頃からあった。その年齢になって、私そろそろ結婚しなくちゃいけないのかなって感じになって。(熊 J)

(結婚に対して) 前向きですね。子どもが大好きで、子どもが欲しくてというのがあって。なので子どもを産むのにお父さんがおらんといかんよねというのと、まだその当時、20年前は事実婚というのがようやく、「夫婦別姓だって？」というくらいの時期ですよ。あと苗字が変わるのに憧れもあったんですよ。違う名前になるというのも。29になると(周りが) どんどん苗字が変わっていくので。結婚式、何回出たかになってくるので、自分も変わりたいみたいのはあったので、(結婚) 願望はありました。(熊 K)

やっぱり好きな相手を、好きな気持ちのまま結婚したいなって。(北 C)

年賀状などに「旧姓〇〇」と書いてくるのに一種の憧れがあったんですよ。ああ、いいなあ。結婚したら、子どもが出来て、子育てしながら暮らしていくもんだなあ、って思っていたんですよ。(北 J)

以上のように結婚の理由として多かったのは、子どもが欲しい、年齢制限、苗字が変わることへの憧れ、相手に対する好意などであった。

ここからうかがえることは、結婚自体は「当然するもの」という意識が先立っているという点である。特に注目すべきは、「子どもが欲しかったから」という点であろう。多くの女性にとって子どもを持つということと結婚は結びついており、子どもを持つにあたっては、法的婚姻をすることが前提となっている様子が見受けられる⁴。

結婚前に描いていた夫婦関係の具体的なプランについては、18名が「あまり考えていなかった」と回答している。その他、「両親の関係があまりうまくいってなかったので、仲の良い明るい家庭にしたかった」(東 E) や「亭主関白はいや」(東 A) といった漠然とした希望があった場合でも、では結婚後はこのようにしたいといった具体的なプランがあるわけではなかった。

さらに、性別役割分業については、「そんなものだと思っていた」(北 M)、「母親が専業主婦、それが当然と思っていたので自分もそうなるだろうと思っていた」(東 F) など、とりたてて深くは考えていなかったという語りがあった。

2. 結婚後の性別役割分業意識

結婚後の実際の夫婦関係について尋ねたところ、多くの女性が、明確な意志で性別役割分業を肯定しているわけではないが、あまり抵抗を感じずに現状を受け入れていることがわかった。しかし、受容の仕方は人によって様々で、温度差があった。

そこで、ここでは、①性別役割分業を明確に肯定しているパターン、②あまり疑問もなく、そういうものとして肯定しているパターン、③疑問を抱いているのだが最終的には受け入れているパターン、④性別役割分業から外れているパターンの四つに分けて分析したい。

まず、「性別役割分業を明確に肯定しているパターン」に分類される女性たちの語りを見てみよう。性別役割分業の肯定の仕方はさらに二つの傾向に分かれており、一つは、性別役割分業が当然であり理想であると思っているケース、もう一つは、そもそも結婚前から相手が家事をまったくできない人であると分かっていたケースである。

性別役割分業が当然であり理想であると思っているケースについては、次のような発言があった。

性別役割分担が理想だと思っていた。夫からは家のことは全部任せると言われた。家のこと、子育て、夫の仕事の手伝いを自分が負担して、不満はない。(東 A)

この発言から、東 A さんが、家事・育児は全て引き受けた上、さらには夫の自営の専従者として仕事のサポートまでしていることに満足をしていることが読み取れる。

また、次のように、男女にはそれぞれの分野があり、男性を立てた方が家庭は円満であると考えている人も見られた。

家事育児の負担の偏りはあるかも知れないが不満はない。夫は全くやらないわけでもなく、男性ならではの仕事はしてくれる。性別役割分担に違和感はないと思うようになった。家の中で男の人たちが気持ちよくしていると家庭がうまくいくとか、そういうことを「子育て講座」で教わった。(東 B)

二つ目の、結婚前から夫は家事が全くできないと分かっていたため、家事・育児は自分が引き受けるのが当然という意識で結婚をスタートさせたというケースとしては、以下のような語りが見られた。

実はお母さんが何もさせておられなかったんですよ。末っ子長男の跡継ぎが生まれた的な感じで育てられるもんですから。(熊 G)

主人との結婚になったときには家事は全部私だなどは思ったんですよね。自宅生だったし、家から出たことがない人だったので、なんにもできなかった。(熊 K)

このケース場合は、性別役割分業についてどう考えているかという以前の問題で、相手と結婚する以上は家庭内の役割は自分が担うことになるとはっきり分かっており、実際に結婚後は女性役割を引き受けている。

次に、性別役割分業に疑問を持たずに、「そういうものとして肯定しているパターン」に分類される発言について見てみよう。一部には明確な性別役割分業肯定派もいたものの、多くの女性はそれほど強い意識はなく、あまり疑問もなく「そういうものである」と思っ

て現状を受け入れているようである。

特に不満はない。(東 C)

性別役割分担ではなく、家族の役割分担として家事育児をしている。葛藤はない(東 N)

理想もなかったし、働き続けていればということもなかったもので、こんなものかと思う。(熊 C)

当初は結婚すれば会社を辞めなきゃいけないという風習だったんですよね。当然だった。専業主婦だったので、やっぱり女は家を守るという古い考えがあつて。(北 H)

(家にいることについて)自分は初めからそうしようと思っていて、夫の希望でもあった。(北 L)

仕事を一生やろうという強い意志はなかった。夫も(そういう自分の気持ちを)喜んでいて。世の中の一般的な結婚観は恋人同士の夫婦だと思うが、現実としては妻より母。主婦をするのが当たり前だと思う。(北 M)

夫の母親は専業主婦。そんなものだと思っていた。(北 N)

このように、自分の母親も専業主婦であったからそういうものであると思っているというような生育環境による受容や夫の希望など理由は様々であるが、性別役割分業を受け入れることについてさほどの葛藤はなさそうである。

さらに、「疑問を抱いているのだが最終的には受け入れているパターン」に類する発言を見てみよう。一部、回答者の中には性別役割分業を疑問視している人もいた。しかしながら、多少の疑問を抱いている場合でも、夫の勤務形態との兼ね合いや、夫の意向に沿う形で結局は女性役割を引き受けている。

(夫は)普段はとにかく朝早く夜遅い生活だから。(東 L)

自分が働いているんだったら分担しようと思っていたんですが、専業主婦だから。(夫の)仕事内容もわかっているから、無理も言えない。(熊 I)

これらの発言からわかるように、夫の勤務形態とのすりあわせで、性別役割分業の状態であることを納得しているのである。

また、自分は活動的なタイプで専業主婦には向いていないと思いつつも性別役割分業を受けて入れている発言や、元々は男女ともに働いている方が良いと考えていた女性でも母親役割を求める夫の意向に沿っているといった発言もあった。

夫が家計の分担はすごく保守的で、夫が全部出すって。私には出させないみたい。(仕事よりも)子どもの方に専念すればって。(東 H)

旦那が働かないでって。働くって言った時も、お昼までのパートでしょ？子どもちっちゃいみたいな感じ。(熊 E)

また、少数ではあるが、はっきりと性別役割分業に疑問を抱いている女性もいた。

(家事を)ちょっとやったらすごくやったと思う、男性はね。それがやっぱりおかしいんじゃないか。(東 K)

しかし、ここで興味深いのは、たとえ疑問を抱いていたとしても、最終的には女性役割を引き受けているという点である。また、妻の就業に理解のある夫であっても、だからといって家事・育児を分担するわけではない。「夫も手伝ってくれている」という程度である(東 E 他 7名)。つまり、肯定派にせよ否定派にせよ、現実的に日常で行っていることに大きな違いはないようであった。

最後に、「性別役割分業から外れているパターン」に分類される語りを見てみよう。多くの回答者が、性別役割分業については、程度の差はあれ肯定的であるか、あるいは疑問を持ちつつも現実的には女性役割を担っていた。しかしながら、少数ではあるものの、性別に関係なくそれぞれが得意分野を分担している、あるいは夫の方がより多く家事を負担しているという語りも見られた。

実際に結婚したらすごい楽でした。夫が私よりまめな人なので。家事って得意分野があるじゃないで

すか。私は料理とかは得意なんですけど、片付けとか掃除がだめなんですよね。でも彼は、料理はどうでもいいものしか作らないんですよ。掃除とかはきっちりやる人なんですよ。台所とか私がめっちゃめっちゃにしても彼が拭いているみたいな感じで、そこが合う。全然問題にならない。私が散らかして、さすがにちょっとこれはひどいのでかたづけようかというぐらいでも、彼は満足して全然文句は言わない。割と無言でやるタイプ。(東 D)

掃除は夫がやるようになった。そのように私が 10 年計画で育てた。(今では)性別に寄らず分担している。(熊 B)

夫は自分の母親が(身体的に)弱かったせいもあって、誰がこうしなければならないとは思っていない。できる人がやれば良いと思っている。お互いが同じ気持ちでやっている。(北 I)

うちは主人が農家で育っていて、7人か8人兄弟の三男。だから妹や弟の面倒を見るのもそうだし、家事をするのが当たり前で育って来ているから、いろんなことしてくれる。皆さんから「(私には)もったいない」って言われて。(育児は)分担というか、主人がほとんどしてくれましたね。だから、私も好き勝手やらせてもらっています。(北 J)

さらには、結婚前から既に起業している女性からは、次のような発言があった。

自営業もやっているし、性格も強いし、我も強いので、結婚をしてうまく生活をするというイメージの人がいなかった。めんどくさい。しかも仕事をやめるという選択肢が自分の中には全くないので、仕事に煩わしいくらいだったら結婚する必要ないっていう考えだった。子どもは絶対欲しかったので結婚するだろうな、というのはあったが、頭ごなしに、これをやれ、こうしろ、とか言われるのが大嫌いなので、自由にさせてくれて、私のやることに口出さないという状態であれば、別にいいなど。(熊 D)

熊 D さんは、性別役割分業について以下のように語っていた。

もったいないと思う。いい悪いではないし、それが好きっていう方もあるので、それは全然構わないけれど、もしその方がいやいやされているのであれば、すごいもったいないことをされているなど。(熊 D)

彼女は性別役割分業というものの自体は否定も肯定もしていない。また、結婚をしなくても子どもは欲しかったかという質問には、次のように回答した。

全然結婚しなくても、子どもだけは絶対欲しい。(男性の経済力をアテに)してないですね。男性は厄介者としか私の中では。でも子どもは絶対欲しい。子どもを持つために結婚というのはない。形態はどうしても、別れていてもOKだったし。(子どものために離婚を我慢しようとかは)全然ないですね。シングルマザーでもいいし、その方が楽だし。好きでもない人が同じ部屋にいるのは耐えられない。時間もお金も無駄。(熊D)

また、彼女は結婚と出産を別物と考える数少ない事例であった。

結婚と出産は別ですね。元々子どもがすごい好きだったんですよ。だから子どもは絶対欲しかったけど、旦那さんって悪い話しか聞かないんですよ。離婚したりとか。大変で我が儘で、ギャンブルとか。暴力とか。だったら一人で育てた方がいいし、それをクリアしてくれる男性がいれば結婚してもいいし。駄目であれば、他の道もあるんじゃないとか。(子どもと結婚は)全然リンクしてないですね。離婚することがいいとは思わないけど、子どもがいるから離婚できないというのはもったいない(熊D)

ただし、彼女の場合は、結婚前から起業しており、結婚後も事業拡大するなど仕事が順調で、自分自身に収入があるという状態であるからこそその強気であるとも言える。

第2節 結婚のメリット・デメリットについての意識

本節では、女性たちが結婚のメリット・デメリットをどのように考えているのかを検討するために、調査質問項目の中でも「結婚して良かったこと／結婚して得た最大のものは何か、及び「結婚して我慢していること／結婚しなければ良かったと思うこと」は何かという質問の回答を分析して、回答者が「結婚して良かった」、「結婚して我慢している」と考えている内容を明らかにしていく。

また、本調査は質的調査だが、本節で扱う質問は単純で回答も明確なものが多かったため、まず全体の傾向を見るために回答を以下の項目に分類し回答数を示した。

「結婚して良かったこと／結婚して得た最大のもの」(以下「結婚してよかったこと」とする)への回答はその内容が共通するものをまとめて、①「子ども」、②「経済的安定」、③「パートナー」、④「家族」、⑤「精神的安定」、⑥「自らの成長」、⑦「人とのつながり」、⑧「結婚の社会的評価」という8項目に分類した。(図1)

同様に「結婚して我慢していること／結婚しなければ良かったと思うこと」(以下「結婚して我慢していること」とする)への回答は、①「夫の束縛・干渉」、②「家事育児への夫の協力不足」、③「自分の時間・都合を優先できない」、④「経済的状況」、⑤「仕事を辞めた／仕事を変ったこと」、⑥「子どもがいることで生じる制約」、⑦「親との軋轢」、⑧「夫

の存在そのもの」、⑨「姓」という9項目に分類した。(図2)

以下、図1及び図2を参照しつつ内容を質的に分析していく。

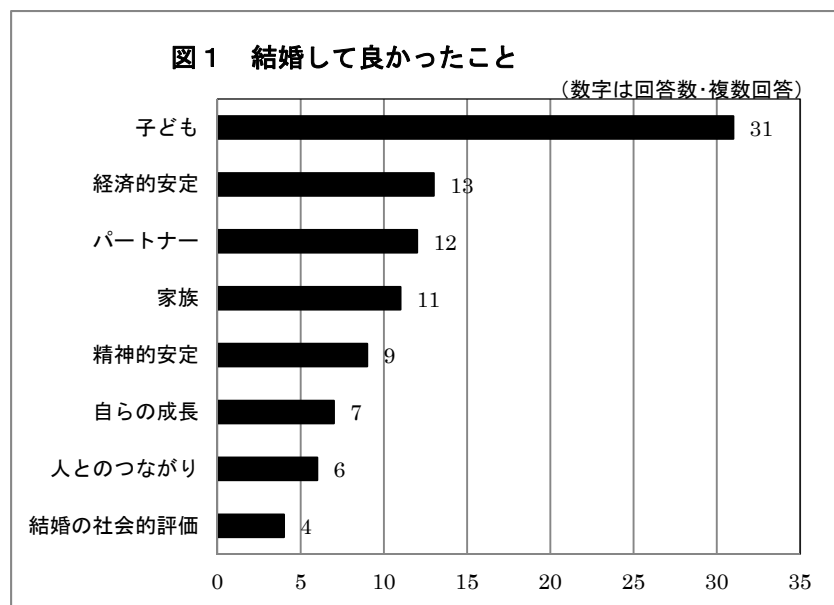
1. 結婚して良かったこと

はじめに図1をみていくと、「結婚して良かったこと」めぐる質問に対しては「子ども」という回答が最多で、これに「パートナー」、「家族」という回答を加えると他の回答を大幅に上回ることがわかる。つまり「結婚して良かった」ことは大枠では家族を得たことと考えられる。

「子ども」という回答を詳細に見ていくと、「子どもが持てた。それが一番嬉しい」(北L)というストレートな回答から、「(結婚前は子どもに関心が薄かったが)生まれたら可愛いと思った。子どもを持てて良かった」(東N)という回答まで内容は一様ではない。だが、いずれのケースでも

「子ども」が結婚における重要な要素であるとの認識は強い。

さらに、子どもをめぐる回答と関連して、子どもをもつためには結婚制度が重要であるとする回答がみられた。「夫はどうでもいいんだけど子どもが欲しいから。でもそのためには結婚して



いないと」(東M)、「結婚制度としてはどうかと言えば、子どもがいなければ制度も必要ないかもしれない」(東I)、「(女性一人で家を構え仕事をして子育てすることは無理なので)一応家族という形のなかで子どもを生んで育てられたということに関しては、結婚制度はいいのかもしれない」(東J)、「子どもを持つには結婚しなければ。結婚が必要だと思う」(熊A)等である。ここには結婚制度内で子どもを持つことの重要性が語られ、夫よりも子どもを優先する傾向が見られる。

また、「子ども」の存在は「人とのつながり」ももたらす。子どもを通した「人とのつながり」には、「幼稚園では贅沢ではなくても暮らしを楽しむという気風の人たち」が多く、生活上の価値観が似ている人と「子どもを通してつながる出会いなども良かった」(東C)という例や、「子どもがいると世界が広がるんですね」(熊F)という例がある。熊Fさんは子どもを通したサークルや幼稚園等での異業種の人々との出会いから「社会の問題が

色々みえてきて」、「歴史とか政治とかいろいろな関心」を持つようになったと述べている。さらに子どもと関連して、結婚や育児をめぐる様々な経験を通しての「自ら成長」を結婚により得られたとする回答があった。「子育てをして忍耐ができるようになった」（東 B）、「責任感をもてるようになった」（熊 A）等である。

他方、「パートナー」については、「良き話し相手、寄り添える人ができた」（北 N）、「人生を一緒に歩く人が、パートナーができた」（東 M）という単純な回答の他に、培ってきた関係性を述べるケースが複数あった。東 I さんは、結婚して 26 年たっているが、「口もききたくない時期」もあったと言い、「そういう時期を乗り越えて理解できた」ことが良かったと語っている。また「子ども、親きょうだい、女友達にも誰にも言えないことはあるが、それを全部言えるのは夫しかいない」（東 E）、あるいは、「(子どもを亡くしたという) そういう経験が二人の絆になった」（北 I）等と深い関係性に言及しているケースもある。つまり「子ども」の存在は無条件に結婚で得られる重要なものという認識に対し、「パートナー」については、存在そのものより良好な「関係性」が重要視されていると見られる。

次に、「経済的安定」という回答は、例えば子どもを 3 人産んで子育て期間中は「働かなくてずっと家庭にいたことができた」（北 L）というように、主に無職の主婦にみられた。これらは、働かずに主婦として家庭にいられることが幸運だという認識である。その一方で必ずしも夫への経済的依存を肯定するわけではないが、結果としての「経済的安定」をあげたケースもある。それは、「結婚していなかったら、(結婚前の) あの時点で、あの仕事で、どうなっていたか分からない」（熊 C）と結果的に経済的安定を結婚に求めてしまったというケース、あるいは「一人で生活できるぐらい仕事をしているわけじゃない」ので「離婚したら食べていけないです」（北 H）というケースである。このように結婚で得られた「経済的安定」の内実は、経済的安定が得られて幸運だという語りから、実際的な選択という語りまで幅がある。また、「精神的安定」は、未婚とみられることによるプレッシャーから結婚したことで解放され安心感があったというケース（東 N、熊 H）を除いては「経済的安定」とセットで回答されていた。

最後に「結婚の社会的評価」とは、「結婚していると一応一人前みたいな目ってありますよね」（東 J）、「家庭をもっていることの社会的評価は高い」ので「信用度も高い。一人前として扱ってもらえる」（北 K）といった他者のまなざしを意識した内容で、これが結婚で得られることのひとつだという回答である。

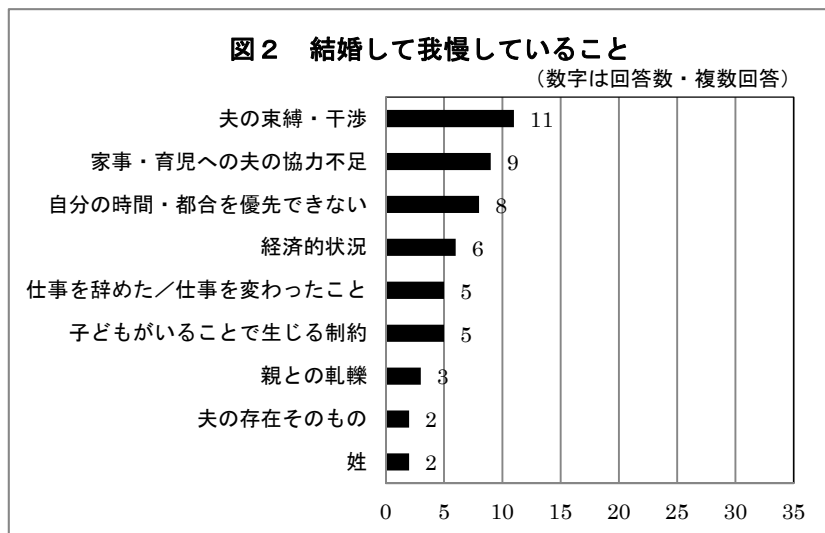
2. 結婚して我慢していること

次に、「結婚して我慢していること」をめぐる回答をみていく。

図 2 を参照すると、図 1 ほどの顕著な傾向はみられないものの、「夫の束縛・干渉」と「家事育児への夫の協力不足」が回答の上位を占めていることがわかる。「夫の束縛・干渉」は、「夫は夫の友人が来ると、私が外出するのを嫌がる。出たいのに我慢することも

ある」(北 N)、「夜出ることあんまりよく思っていないみたいです。なんか自分のお父さんじゃないのに、

『夜危ない』って言いますね」(北 A)などのケースから、「PTAなどに出る様になって家にいないと怒鳴られた」(北 M)や「一度か二度ちょっと手をあげられて」(北 H)等の経験から一時は離婚を考えたというケース



(出典) 筆者作成

まで程度に開きがあった。しかし、いずれのケースにしる、束縛や干渉が危うさを伴う状況として認識されているわけではない。

他方「家事・育児への夫の協力不足」については、「子どもに関しては絶対に私」で、出かける必要があっても子どもの預け先を考える自分に対して「主人はどんどんスケジュール入れていくわけですよ。そこは不公平だと思う」(熊 D)と母親による育児を当然視されることへの不満や、「身勝手な話だけれど、食事作りがめんどくさくなっちゃった時」と妻だけが日常的に継続して家事を担うことへの不満などがみられる。

ここで注目したいのは、家事・育児を「何もしてくれないから腹が立って、子ども連れてプチ家出」しても反応が少ない夫に「そんなことが繰り返して、繰り返して。あまり期待しないように」(熊 I)になっていったという語りである。他にも、「家のことを手伝ってほしかったが、自営になったとたんに、休んでいられないと言われ、手伝ってもらうのはあきらめた」(東 A)等、不満が「あきらめ」になって、我慢しているという認識さえ薄らいでいくようだ。実際、「結婚して我慢していることは何ですか」との質問に対して、まず返ってくる言葉が、「我慢していることはない／あまりない」であったことにもみてとれる。

同様に「仕事を辞めたこと／仕事を変わったこと」についての不満もやがて不満とは考えないように変わっていく様子が語られている。子どもができて仕事を辞めたことを「残念だったという気はします」と思いつつ「辞めたあとがとっても楽だった」(東 K)ので辞める時期だったのかと思ったというケース、もし結婚しなければ仕事に集中できたかもしれないが「すごく出世して社長になりたい」(東 H)と思ったわけでもないというケース、仕事を辞めたことを思い出す度に結婚しなければ良かったと思うが「いつもは封印して」おり「必要とされる場所にいるのが良い」(北 N)と考えるようになったケース等があった。

一方で、前項で述べたように、「結婚して良かったこと」への回答の最多が「子ども」ではあっても、家族のために「自分の時間・都合を優先できない」ことと「子どもがいることで生じる制約」についての不満はある。この二つについては、乳幼児のいる時期は「子どもともいっぱい遊べた」（東 F）と捉え、あるいは、自分の時間が限られているという不満は「限られていても、そこをどうやってうまく使おうかと考えたりするので、逆にいいかなと」（熊 F）と発想を逆転させてバランスをとるケースもあった。

「経済的状况」への不満はお金をめぐる夫婦の諍いを上げたケースと、例えば、自分の「収入がないので節約でやっていこうとしているため、我慢と言えれば我慢かもしれない。いちいち夫に承諾を得ているのも我慢かもしれない」（熊 C）、不満は自分の小遣いがないことで、夫の稼ぎは「働いていないから、使えないんですよ。使ってよくないような気がして」（熊 I）という無職の主婦の不満などである。

その他、別居／同居の別に関連してはいないが親との軋轢を経験したケースや、夫の存在そのものを我慢しているというケース、結婚と同時に改姓せざるを得なかったことを不満とするケースがあった。

第3節 夫婦間の対等な関係への意識

第1章で述べたように、女性学が問題視した夫婦間の性別役割分業は、そこに「夫は主で妻は従」という夫が優位に立っている関係を前提としたものであった。したがって、妻は夫に従うという主従関係ではなく、互いに対等な夫婦関係を確立するためには、従来の性役割は解体する必要があるとされてきた。しかし、当の女性たちにはそうした意識があるのだろうか。女性たちは夫婦の関係性において、「対等」を望んでいるのだろうか。

1. 女性たちが意識する「対等な夫婦関係」

そもそも、「夫婦が対等である」というのはどのような夫婦関係であると女性たちは思っているのだろうか。本研究では「対等な夫婦とはどのような関係だと思いますか」という問いに対する女性たちの語りから、「対等」が意味するものを大きく三種類に分けて分析した。

一つ目は、「経済的な対等性」である。

収入が同じという事が平等な関係だと思うので、私たち夫婦は対等ではない。収入がなくても家事分担をしていけば平等とは思わない。（東 A）

今は自分の仕事があり収入があるので、収入だけでなく、直に社会とかかわったことで責任もあるし、対等になれたと思う。（夫婦）それぞれが経済的に自立するのが理想だと思う。（東 N）

イメージとしては、女性も経済力があるのが対等だと思う。(北 L)

以上のように、互いに経済的な貢献をもって夫婦は対等という語りが 9 名からあった。ただ、「収入が全く同じ」という発言は少なく、多くの女性は収入の割合や額について言及しなかった。さらに、「家事分担も含めて対等」という発言が、自立できる収入を得ている数名の女性からあった。

ほとんど対等だと思います。わかりやすいところは、やはり家事の分担ですかね。家事って結構、私にとっては大きいファクターで、目安として大きいですね、それをやるかやらないのか。口でどんなに素晴らしいことを言っても、家事は行動じゃないですか。いくら素晴らしいことを言っても全然家事をやらないとか、たとえ夫はそんなに悪気がなくても、ものすごく嫌な気分になると思うんですよ。(東 D)

専門職として働く東 D さんは、独身の頃から仕事と家事育児を抱えて疲労困憊するような結婚生活はしたくないと考えていた。彼女にとって、家事を分担するかどうかが夫婦間の対等さを図る際に重要な要因であった。

二つ目は、「互いに言いたいことが言える／主張し合う／話し合う関係」である。

言いたいことが言える関係が対等。信頼が大切。(東 B)

互いに話し合っ決めてような夫婦は対等だと思う。(熊 C)

何でも言い合える仲で、どっちかが抑えて我慢してというのではなくて、お互いにパートナーとして何でも言えて相談できてというのが良いかなと思っています。(熊 F)

このように、どちらかが一方が発言して片方が黙ってしまうような関係では対等ではないとして、「会話・発言の対等性」を挙げた女性が 11 名であった。

三つ目は「思いやって助け合う／尊重し合う関係」である。

困ったときは相談して助け合いながらやっていけるので、(我々夫婦は) 対等かと思う。(夫は) 嫌なことを強いたりしてはしていない。お互いの気持ちを思いやりながら行動できる夫婦が対等 (東 I)、

互いに助け合える関係。夫婦関係というよりパートナーシップ。(熊 B)

(夫婦が) お互いに対等でバンバン言い合うっていうのも、それはそれでちょっと……。対等というか互いに尊重し合うというか、互いに尊重して感謝している夫婦が一番理想。(北 A)

このように「精神的に支え合う対等性」を挙げた女性が 16 名であった。また、以下のケースのように、「人間として対等」「心の中では対等」「気持ちの上での対等」といった表現もこのカテゴリーに含めた。

一般的にはやっぱりなんでも家事分担するとか収入も二人で合わせてそこから引き出すとか、そういう目に見える対等みたいなことなんだと思うんですけど、私もぱっと思い浮かぶのはそれなんですけど。でも、よく考えてみると対等って人間として対等ということなのかなと思って、だから、人間としてお互いの存在を認めあってお互い価値観が違うときも、どっちかが一方的に、こうしろとか言うんじゃなくて意見をぶつけあって、そのなかで妥協していくというようなのが対等なのかなという。(東 H)

お互いを思いやるじゃないですけど、言葉で言わなくても「大変そうだから、今日はきつそうだから、僕がやろうか」とか。気を付けて、「いつもありがとう」とか、さりげなく、察してくれるようなイメージですかね。心の中では対等な夫婦を希望しますね。本当の心の中というか。(北 C)

(夫とは) 給料は違うが対等です。気持ちの上での対等。人生の中で大切なのはお金ではなくて、稼ぐ人が偉いということではない。夫婦に上下はない。(北 N)

さらに、以下のケースのように性別役割分業が対等な関係を作るという語りも複数あった。

対等じゃない夫婦とは、夫に妻が仕えるような形。でも、それぞれ特性を生かして生きているのだから、人間関係としては対等かと思う。(北 M)

2. 対等な夫婦関係を望む女性

次に、「対等かどうか気になるか／対等でいたいか」「夫婦関係がうまくいくためにはどうしたらよいと思うか」という問いに対しての語りから、女性たちは「対等な関係」を望んでいるのかどうかを分析していく。

まずは、対等な夫婦関係を実践しているという女性たちの語りである。上記の三つの「対等」のいずれかをもって、自分は夫と対等であると考えている女性は 19 名であった。

対等かどうかは重要だと思う。小さいことは譲り合わなければならないと思うが、どちらかが我慢しているのは良くないと思う。(自分たちは) 対等だと思う。どちらかが決定権を持ったり支配したりしない、互いに主張し合える関係。(東 C)

お互いに思ったことが言い合えるから。どっちかがずっと我慢していたら家庭にも響くかな、というのはあるので、お互い好きなことが素直に言えるのが一番いいかなと。主人とはお互い思っていることは素直に言おうとは決めているので。(北 D)

(対等かどうかは) あまり気にしないけど、ずっと対等だと思っていた。専業主婦の時代も夫婦は対等だと思っていた。妻として母として一生懸命やっていたので、対等だと思う。(北 M)

また、夫婦が互いに主張をぶつけ合って対立するようなことがあったとしても、長期的に見れば、我慢しないで対等な関係を続ける方が結婚生活の維持には良いという発言があった。

たまに言いすぎて子どもの前でけんかみたいなことになるんですけど、子どもに止められたりとか、なんでけんかするの。(でも) やっぱりお互いうまく言い合う。お互い信頼しあって。我慢するとどっちかがくずれてしまうかなという。(北 D)

(夫が家事育児にほとんどかかわらないことに対して) それを私が 2 年前にですね、ブチ切れまして、あまりにもそういうのが長かったから。主人に、息子が中学 3 年生の時、「あなたは今に痛い目に会う、子どもからどんなに言われてるか知ってるの？」とボロクソに言いました。(夫が) あまりにも家の事をしないので。そこでブチ切れて以来、(夫は) ちょっと目覚めたのかとかいうか、ちょっといかんなどと思ったのか、家の事にもちょっとずつ関心を持つように(なった)、それまで全く関心なかったんですけど。そこからまたちょっと(夫婦の関係を) 作り直し状態なので、うーん、良かったと言えば良かったかなと思うけど。(熊 K)

また、専業主婦であって経済的な対等が望めないのであれば、あえて夫に対する物言いを強くすることによって対等な関係を作っているという語りもあった。

対等というか、私の方が上(笑)。物言いは上なんですよ、すごく失礼な感じで。稼いできてくださっているのはこちら(夫) なんですけど。たぶん、これで上から視線でものを言われて、稼いでこられたら、たぶん私は嫌です(笑)。稼いでくれてきてありがとう、でも、ものの言い方は私の方が上!(笑)。(熊 I)

続いて「対等を良しとしない」「対等でなくていい」女性たち（9名）の語りである。「良しとしない」と言っても、「夫に服従する妻であるべし」という事ではなく、「夫を立てた方がうまくいく」という意識であった。

夫が上だと思っている。夫を立てようという意識があるので対等ではいけないと思っている。自分は強い性格なので、少し下の方が良い。上手くやっていくにはその方が良い。（東 B）

「俺が食わせてやっている」と言われたことがあって、「お金はそうかも知れないけど、そうやって綺麗なシャツやパンツが着られるのは誰のおかげだ」と言い返した。ただ、男性は言い返されるとシュンとなっちゃうので、そのプライドの部分は、たとえそうじゃなくても立てておいた方が家庭は上手くいく。（東 F）

このように、あえて「対等ではない」関係を肯定していた。また、夫婦間で「経済的な対等性」を求めても無理であり、対等になりたいと思わないという発言があった。

対等ではないが、対等になりたいと思わない。そこまで頑張れない。夫には感謝しかない。収入がたくさんある男の人が上だと感じる。（東 A）

対等なイメージは、互いに仕事を持っていて全部半々というか、資産から全部半分にして意見も言い合う。私にはできない。女としてちょっと甘えさせてほしいというか、自分はそのままで働いていないので対等にはできない。ずるいんですかね。（北 H）

その他に、「夫とは対等な関係。夫を立ててはいるが、束縛はされていない」（北 I）というように「対等であること」と「夫を立てること」が矛盾していないという語り、「妻のほうが上」という語りが数名ずつから行われた。

3. 葛藤を抱える女性

さらに、「対等を望んではいるが、実際には夫を立てている／自分を抑えている」と、多少なりとも葛藤を抱えた女性が複数いた。対等な関係でいたい、夫に不満をぶつけると反発されるので「疲れる」「面倒くさい」「ケンカになると煩わしい」ので、自分を抑えてしまうという。こういった女性たちの中には離婚に至ってしまったケースもあったが、夫との関係の改善を模索しているケースもあった。

北 C さんの夫は、「女の人は女の人にしかできない仕事、とか、男の人の役割っていう

のを、結構明確に持っている」人であり、妻が仕事と家事の両立で悩んでいる時でも、あまり妻の意見は聞いてくれないと言う。

男性って言われるまで片づけたりしなかったりするじゃないですか。でも、それをあんまり言うのと、「うるさい」みたいになるので、そのさじ加減が難しいというか、何も言わないで片づけた方が良いのかなと思ったりするんですけど。意見の相違で結論の出ないときは、すごく疲れるじゃないですか。そういうストレスをお互いなるべく貯めたくないとか。最初はすごく正面からぶつかって行ったりしたんですけど、結果的に、自分が納得するようになれば、家庭はどうでもいいかなって思うようになってきたので(笑)、その時は納得いかなくても、後で自分が納得すればいいかなって思っ。ちょっと柔軟に思えるようになったかなあ。 (北 C)

夫は妻のことを気遣っていない訳ではないと言う。両立が大変であれば「じゃあ仕事をちょっと休んだら」と言ってくれる。ただ、夫自らが家事をする、という発想はない。

(夫は)「実質的な平等と形式的な平等は違うんじゃないか」という話をよく言う。対等である前提として、女性は女性しかできないこと、男性には男性しかできないことが元々あるから、それを飛び越えて全部を平等にするっていう事については、難しい部分があるんじゃないかっていうのを主人は言う。それは結婚して、周りとか、自分の兄弟とみても子育て中は仕事が難しいとかあるから、そこをうまく両立させていった方が、結果的にはうまくいくのかなって。奥さんが働くんだったら他に預けるという問題を一つ一つクリアしていかないとうまくいかないことが意外と多いので、そういう意味では実質的な平等と形式的な平等というのは少し違うなあっていうのは、結婚してから思うようになりましたね。(北 C)

夫と妻が仕事と家庭責任を平等に分担するという「形式的な平等」には無理があり、子育てがある女性は仕事との両立が難しい実情を考えると、そういった男女の「特性」に配慮した「実質的な平等」を目指す方が良いのではないかという夫の意見に対し、北 C さんも徐々に賛成するようになってきたと言う。

(夫と同じような考えに) なりましたね。(ジェンダーやフェミニズムの) 本に書いてあるようにはうまくいかないのかなってことは(わかってきた)、自分の中の変化としては。(北 C)

しかし、「嫁に来たんだから夫と同じ意見で当然」と考える夫に対して、「もうちょっと私の意見にも寄り添ってほしいな」という不満もあり、夫の考え方に納得する部分も多いが、まだまだ心の中では葛藤が続いているようであった。

また、収入の面で夫と同じぐらいの稼ぎがありながら家事育児を全面的に負っているという状況に対して、「夫を優先する方が結婚生活はスムーズに行くが、自分自身は納得できない」と葛藤を抱えている妻の声もあった。

熊 Jさんは結婚後、農業を営む義両親と同居し、結婚前の仕事を続けながら家業を手伝い、嫁として家を切り盛りし、3人の子どもを育て上げた。何役もこなす妻に対して夫は家の中のことをほとんどせず、妻は苛立ちがつのっていき、不満をぶつけることもあったと言う。

機嫌が悪くなるので、機嫌が悪くなるぐらいだったら言わないほうがいいかなって思って。こちらでやってしまって済んだったら、そのほうがいいかなと思って。喧嘩してもやらせた方が良かったのかもしれないけど、喧嘩するのが煩わしい。そんなガチャガチャ言っているより早く寝たい。

私の結婚イコール「お手伝いさん」みたいな感じでしたね。みんなの生活のお世話をする係とか、そんな感じの結婚でしたね。その中で子育てをしているという感じ。

対等じゃないことの方が多くはないですか。どうしても、付属品みたいなところが、女性は。対等といえば、やっと対等に、仕事で持ってくる報酬の差で対等じゃないという風にはなっていると思うんですけど、私の場合はずっと報酬は対等だったので、だからそういう面での、自分の気持ちは対等で、もしくはそれより上、みたいな。だからそういう外で働いて給料をもって帰ってくるという部分で対等だけど、家の中に入った時は全く対等じゃないというギャップはありますよね。片やテレビ見てゆっくりしていて、片や一生懸命食事作ってという。(熊 J)

不満をぶつけても、夫の反応は「いや、(家事は)できないから」だったと言う。いつまでたっても夫が家事をすることはないので、結局は妻がやってしまう。経済的に対等な関係であっても、家庭責任に関してはまったく対等ではなかった。しかし、経済的に対等であるということは北 Cさんの自信につながり、結果的には結婚の継続を促した。

いつでも(家を)出られるという自分がいたから、出なかったのかもしれない。まだ我慢ができる範囲だと(思って)。我慢ができる範囲を自分が広げていったところもありますけど(笑)。いつでも外に出て生活できるという自信はあったんですけど、あえてしなかったのは、我慢の範囲を少しずつでも広げて、で、今になったら、まあ、いいかって。(北 C)

さらに、夫は同居する義両親と北 Cさんの間に何かあった時は、妻の援護に回ってくれた。離婚することなく続いてきたのは、それが大きな要因の一つだったと言う。

第4節 小括

本節では、第1節から第3節までの分析から明らかになったことをまとめる。まず、夫婦間の性別役割分業については、多くの場合、結婚に際してあまり強く意識されず、強い抵抗感もないようであった。過半数（25名）の女性に、結婚前も結婚後も「現状にあまり不満はない」「そもそも疑問に思っていない／意識にない」という傾向が見られ、また、少々疑問を持っていたとしても家庭責任を担っていた。彼女たちが性別役割分業を受け入れる理由は、「母親」にしかできないことがあるという意識の強さによるものが大きく、子どものことは母親の領分という規範の内面化が見られた。性別役割分業を受容する理由は「妻役割意識」というより「母親役割意識」によるものあり、夫のためというよりは、子どもがいる以上、母親の行動は制約されて当たり前、自分が家庭内の責任を持つのが当たり前といった意識であると思われる。また、夫も妻に対して「妻役割」よりも「母親役割」を求めていることがうかがえる。

次に、結婚のメリットとデメリットについての意識に関しては、「結婚して良かったこと」が多くケースで「子ども」だったことは明らかで、子どもを含む家族を得たことが結婚の喜びとして捉えられていることがわかった。しかも「子ども」は単にその存在だけではなく、子育てを通して生じる同世代女性との親交や、それまでは知り合う可能性が低かった人々とのネットワーク構築などが結婚し子どもをもつことによって得られた好ましいものと捉えられている。その一方で、結婚相手をめぐっては、必ずしも結婚相手を得たことではなく、パートナーとしての良好な関係性が望ましいものとされている。この関係性を左右するのは、夫婦間の権力関係、つまり夫婦の対等性や性別役割分業のありかたにかかっていると考えられる。

一方、「結婚して我慢していること」については、「夫の束縛・干渉」と「家事育児への夫の協力不足」が多数を占めた。これらもパートナーとの関係性同様、夫婦の権力関係と関連している。しかし、「夫の束縛・干渉」は深刻な状況とは認識されていないため危機感の薄く、「家事育児への夫の協力不足」には家事・育児への夫の協力を得ることが難しい状況から、不満があきらめになり、不満と感じないような状況が生じている。同様に「仕事を辞めたこと／仕事が変わったこと」についての不満も、やがて不満を抑えて現実と折り合っていく様子がみてとれる。ただし、「仕事を辞めたこと／仕事が変わったこと」への不満と折り合うことは、「自分の時間・都合を優先できない」ことや「子どもがいることで生じる制約」への不満を、子どもと過ごした時間を喜びとし、限りのある時間を有効に使うこと乗り切ろうとすることは質的に異なる。「子どもがいることで生じる制約」等は、育児終了期には一定程度解決されるが、「仕事を辞めたこと／仕事が変わったこと」はライフコースを左右する可能性がある。しかし今回の調査では、いずれにしても回答者にそうした意識の薄いことが明らかな傾向としてみられた。

さらに、子どもを持つためには従来の婚姻制度に則ることが必要であると考えられてい

ることが分かる。このことは、子どもは欲しいが結婚はしないと言っていた女性でも、結婚して良かった点について「枠組みの中で子どもを育てられたこと」を挙げていることからもうかがえる。

夫婦間の対等な関係への意識に関しては、ほとんどの女性は夫との「対等」な関係を望んでいるということがわかった。女性たちによる「対等」の捉え方は様々であり、「経済的な対等は無理なので、精神的に対等でいたい」というように、それぞれの夫婦の関係性の中で力関係のバランスを取ろうと試みているようであった。また、「夫と対等でいたい」と「夫を立てる方が良い」は、必ずしも相対する考えではなく、結婚生活をうまく維持していくための「戦略」の違いであると考えられる。「対等に主張し合う関係が良い」「どちらかが我慢したら無理が出てくる」と考える女性は「対等」でいることで結婚生活に満足感を覚えている。他方で「夫を持ち上げておけば、機嫌も良くなるし、私も楽」と考える女性は、夫婦関係に「対等を求めてない」と言いつつも、自らが「へりくだる」ことによって満足できる夫婦間のバランスを図っているのであり、夫に従属する関係性を望んでいるわけではなかった。

しかし、たとえ妻が就業していたとしても妻の全面的な家庭責任に疑いを持たない夫との関係を対等ではないとして、不満を感じる女性のケースもいくつか見られた。家庭と仕事の両立に頭を悩ませるのは妻だけであり、「夫は経済的な責任を果たして妻は家庭責任を果たすので対等な関係」という捉え方もできない。夫婦の良い関係を維持するためには自分を抑えた方が良いのではないかと思いつつ、なかなか納得できない。このような夫婦間の対等な関係への模索が、妻に葛藤を与えているケースも明らかになった。

本研究は、一般に保守的であるとされており、また結婚（式）の情報誌の出版数も多いことから結婚に積極的な土地柄であると仮定して九州を選択したが、当初予想したような地域差は今回のインタビューからはあまり見られなかった。一部、婚家が農家であった場合に、いわゆる「典型的」な男尊女卑傾向も見られたが、それが東京と九州の地域差であると言い切れるかは微妙なところである。これについては、地域差ではなく、農家という就業形態の問題とも考えられるからである。

ただ、「結婚して我慢していること」をめぐる以下の語りは、北九州市と熊本市の女性によるもので、都市部の女性にはみられないものだった。8年間に及ぶ不妊治療を経て出産した北 J さんは、「私は長い間子どもが出来なかったから、いろいろ言われたんですよ」と語っている。また熊 C さんは、結婚後子どもが生まれるまで、「子どもいない夫婦って何してんのって感じだった」と語り、さらに「会社の結婚祝いも子どものメリー（乳児用の玩具の一種）だった」ので驚き、「(結婚したので) 結婚してないとは言われなくなったけど、子ども産んでないとだめなのか」と思った。この2名はこうした内容を辛い経験として語っている。女性は結婚して子どもを生むのが当然という考えが女性を苦しめる可能

性についての周囲の認識が薄い。今回は量的調査ではないので地域差とまでは言えないにしろ留意すべき点であろう。

さらに、就業形態によって性別役割分業への意識に差や傾向が見られるかとも思ったが、これも明確な傾向はなかった。むしろ、今回の調査対象者は全体的に高学歴であり、学校卒業後すぐさま結婚した場合を除き、大半が結婚前に一度は就業している。また、結婚後も、正規か非正規かはともかく、何らかの職業には就いている女性が多い。それでも全般的には、「母親」というアイデンティティから、程度に差はあれ最終的には性別役割分業を受け入れている。資格を取る段階では一生働くことを前提としており、いつ離婚しても問題はないと語っていた有資格者の女性であっても、一人でも十分に子どもを育てられるだけの資力のある専門職の女性であっても「母親役割」として性別役割分業を受け入れている。やはり「子ども」の存在は既婚女性のアイデンティティを大きく左右するものと思われる。つまり、性別役割分業といった場合、問題となるのは夫の関係のみならず、子どもとの関係が強く影響している。

第4章 ケース・スタディ

前章では女性たちの語りをテーマ別に取り上げて結婚に対する意識を分析した。本章では、6名の女性のライフストーリーを紹介し、夫婦間の性別役割分業を軸に女性たちがどのような結婚生活を送り、また結婚に対してどのような意識を持っているのかを分析していく。なお、本章でとりあげたケースは、調査協力者一覧表（表1）の中の6名だが、プライバシー保護の観点から表中の記号を使用せず仮名を用い、同様に地域、年齢、職業等についても記述に配慮した。

第1節 夫婦の性別役割分業をもとにしたライフスタイルを選択しているケース

本節と次節では、夫婦の性別役割分業についての意識と実態を調査対象者の語りをもとに見ていき、それがどのような経緯で維持されるのか、あるいはされないのかを、検討することを目的としている。本節では夫婦の性別役割分業を積極的に受容して家庭を運営している仁科さんと、性別役割分業がもたらす不利益を認識しつつも受容している矢吹さんの2ケースをとりあげる。

1. 夫婦の性別役割分業を積極的に受容しているケース

仁科さんは、50代の専業主婦である。夫の両親と同じ集合住宅ビルに世帯を別にして住んでおり、成人した子どもたちは就職や進学のために現在は遠隔地に独居している。また実家も遠くない距離にあり両親と弟が共に住んでいる。仁科さんは夫婦の性別役割分業を当然のこととして引き受け、その上に自らの人生を築いてきた女性である。

自宅から通学可能な短大で美術を学んだ後に、地元で就職して4年間勤務し、5歳年長で大学卒の公務員と25歳の時に見合い結婚した。見合いは何度か経験し、その中でも「もう一度会いたいと思った」男性を選んだ。結婚を前提として交際し、出会った半年後に「自然な流れ」で結婚した。

「自然な流れ」の中では、職業上の交際や親戚付き合いなどを考えても結婚式を挙げないという選択などは論外であり、結婚により夫の姓に改姓することは当然と思われ、子どもをもつことは自明のことだった。仁科さんは結婚生活に「皆が言うように、明るい、楽しい」イメージを抱いていたと語っており、4年勤務した会社を躊躇なく退職し、家事・育児に専念して、イメージに沿う家庭を築こうと考えていた。

こうした結婚についてのイメージは、結婚後も変わることはなかった。つまりイメージが崩壊するような出来事や困難な経験は特になかったということである。夫婦の性別役割分業として典型的な「夫は稼ぎ手、妻は家事・育児」に基づいた生活の実現は、「結婚前に

仕事は止めてほしい」という夫の希望であり、「自分もそう思っていた」仁科さん自身の望みでもあったため、葛藤や軋轢の生じる余地も少なかったのだ。

夫婦の性別役割分業によって、程度の差はあれ、稼ぎ手である夫に家庭内での権力が生じ、妻は夫に従う立場におかれがちだが、仁科さんの場合はそうしたことも意識されていない。例えば、家計費全体は、夫の「小遣い」の口座と生活費の口座の二つに区分され、仁科さんは後者を管理してきたものの、金額の大きい買い物や、生命保険のような家族の将来に関わる出費については稼ぎ手である夫が「ポンポンと」決めていき、妻の発言権は制限された。しかしこうしたことも、仁科さんにとっては気にならない。「自分のものも買うが、ブランド品なんか買いませんし、文句を言われたことはない」と、家計に一定程度の裁量の余地があって夫が細かく口出ししなければ不満はないのだ。

その一方で、結婚して良かったことは「子どもを持つことができたこと」だと仁科さんは語っている。結婚翌年に長子を出産し、それ以降は「子育てが使命という感じ」で育児に専念してきて、「それが自分にはとても大事なことでした」と振り返っている。しかも「下の子にはまだ仕送りとかしなければならぬので」と完全に子育てが終わったとは考えていない。

このように育児に専念してきた仁科さんは子育て終了期を迎え、現在は「介護にシフトしている」という。「主人の母が要支援2の判定を受けて、家から出られない状態なので、父も身体が弱くて、両親の世話がだんだん大きく」なっている。介護の具体例としては、日々の買い物や病院への付き添いなどをあげていた。しかし、子育てが終了した時期に介護が開始されるという状況を、仁科さんは負担とは捉えていない。それは、「主人の母が近くにいたので子育てを助けてもらったから、息抜きもできました。それもあって今私が義母の世話をしたいと思っている」からである。

実際、夫の両親が同じビル内に住んでおり、必要な時には子ども預かってくれたため、趣味の習い事や、映画鑑賞などの娯楽も特に我慢したということはない。そのため「子どもに合わせなければならぬと不満ということはあまりなかったと思います。出かけたときは出かけることができましたから」と、子育てのストレスを回避することができたのだ。それは、「主人も少しは育児もしてくれました。遊びに連れて行ったり旅行に連れて行ったり。家事も少しは手伝ってくれるし」という程度の夫による協力の比ではない。

このように義母の介護を担うのは当然と思いつつ、他方で、そのことが夫婦の対等性に影響を及ぼしているのではないかと仁科さんは考えている。夫婦の対等性については「主人が上という感じはあります。夫を立てていると思う」との認識をもっているが、「日頃主人の親の面倒も見ているので、私の変な見方かもしれませんが、自分の親を見てくれるという心苦しいことも、私に対してあるかな」と夫をみている。特に最近では義母に「変な幻想とか出てきているので」それに日常的につきあっている妻に対して「主人は私に頭が上がらない」のかもしれないと感じている。

もともと、仁科さんは夫婦が対等かどうかについて深刻に考えてはいない。それは、日常的に互いの生活に干渉せず接触の機会も少ないからだ。例えば「キッチンのテレビは自分が、リビングのテレビは主人が使う」というように自宅内でも一定の距離を保ち、食事は別々にとり、互いの友人を家に招くということもなく、趣味も異なるので行動を共にすることは少ない。せいぜい「両親の買い物もまとめてするため、週末の買い物に一緒に行くくらい」という状況である。特に仲が悪いわけではないが、互いに口出ししないという関係性を維持している。こうした状況を含めて仁科さんは「主人と結婚できて良かったと思う。不満はない」と語り、今後も淡々と暮して老後は互いに支えあっていけそうだと考えている。

2. 不利益を認識しつつも夫婦の性別役割分業を受容しているケース

矢吹さんは40代のパート主婦である。調査時には、子どもが大学進学に伴い家を出る予定で、これを契機に単身赴任中の夫の元へ転居が決まっていた。矢吹さんは不利な立場がある程度自覚しつつも、夫婦の性別役割分業を受容してきた女性である。

短大卒業後に数年間企業で働き、24歳の時に6歳年長で大学院卒の会社員と見合い結婚した。夫の実家は都市部からやや隔たった旧弊な慣習が残る地方にあったため、結婚式直後の「近所へのあいさつ回り」に始まり、冠婚葬祭では「嫁役割」として手伝いを求められ、さらに男子出産を期待されることなどについて葛藤も多かった。そうした地域出身の夫は結婚後に妻が退職して家事育児専門の主婦になることを当然と考えており、矢吹さん自身も結婚を前に「男の子ひとり、女の子ひとりみたいな、ふつうの平均的な」家庭を築きたいと考え「(専業主婦としての)優雅な生活、そういうのができるのかと」期待して退職するつもりだった。

しかし実際には後任者が決まり引き継ぎが終了するまで退職を慰留され、結婚後もしばらくは働き続けた。その際に、仕事で「疲れた」という妻に対して「おれは無理に働いてくれとは言っていない」、あるいは「べつに働いてくれと言ってないから、きついのだったら辞めれば」と家事を分担しようとしないうるさい夫へ失望を感じた。矢吹さんの実家は自営業だったので父親は日常的に家事を引き受けており、そうした家庭で育ったため夫にも家事の分担を期待していたのだ。しかし、夫の実家を訪れた際に、家事はすべて母親が担っていることを知り、夫のこうした態度は「これはもう育った環境なのかな」と考えるほかないように思われた。このような状況は出産後も改善されず、「すごく優しい人だったので子どもの面倒もみて家事もしてくれと思っていました。ところが、家のことはしないし育児もしない」上に「夜泣きしたときも面倒みないし、うるさいと言うし」という夫の態度に反発を感じつつも、家事・育児への協力を求める気持ちは次第に失せてしまった。

こうした事態を招いたのは、夫の側にだけ原因があるのではなく、矢吹さん自身の性別役割分業観、つまり「女は家を守る」という考えも関係していた。矢吹さんの性別役割分

業観は、例えば結婚して良かったことは何かという質問への回答にも現れている。回答のひとつ「経済的なこと」とは、「ひとりで生活できるぐらい仕事をしているわけじゃないので、やっぱりだれかに頼ってないと生活はできないので」と妻が家事・育児を引き受ける代わりに夫の経済力に依存し安定を得るという分業観である。そうした考えの延長線上には、「(仕事を) 辞めずに結婚もしないでいってたら多分きついでらうなって思ったり、全部自分が責任負わなきゃいけない」、「老後とかきついでらうなとか、一人になるので、それはいやだな」という語りに、自らの人生に「責任」を負う覚悟の乏しさと夫への精神的な依存もみうけられる。

それらはまた、もし離婚した場合「帰る場所もないですから、自分の生活を考えると離婚はできない」という現実認識につながる。精神状態が不安定な妊娠期の口論で夫に一度殴られたことがあり、一時は離婚を真剣に検討したこともある。しかし「子どもができたらもう主人よりも子どもがかわいいから」と離婚は問題外となった。

矢吹さんは対等な夫婦のイメージとして「お互いそれぞれ仕事をもっていて、全部半分半分というか、資産から全部半分にして、意見も言い合いという感じを受けますけど」と語り、直後に「あー、私にはできないですね」と付け加えている。それは、「自分もそこまで働いていないので対等にはできない」という夫に依存している現状認識から出たものだ。対等ではないという意識は、例えば「お母さんちょっと体調悪いから寝かせてねとか、子どもに言っているつもりで主人に聞こえるように」するなどというふるまいにも現れている。無意識のうちに夫に遠慮し、直接夫に要求するという態度は控えて、それとなく伝わるように工夫するのである。

しかし、対等ではない夫婦関係に無自覚ではない矢吹さんにとって、結婚生活が辛いものかといえば決してそうではない。まず、自らの依存的な状況を全て否定的に捉えているわけではなく、女性であれば許される「甘え」と捉えているからであり、また、対等性は収入の多寡に関わらず、妻の賃労働によっても一定程度可能になると考えてもいるからだ。矢吹さんは「ずっとそうやって専業主婦できたのですが、主人も単身赴任であちこちにいってしまったので、私のすることが減ってしまった。子どもも手がかからなくなって。それで、なんかしようかなということでも免許(資格)をとったり」というように、5、6年前にある資格を取得した。さらに必要な研修を受けるなどして、カルチャーセンターで講師及び育児スタッフとして週に3、4日ほど働くようになった。友人に勧められて始めた仕事であり「その人がいなければ私はたぶんいまだに専業主婦をやっているかもしれないです」と矢吹さんは語っている。

「自分でもやっぱり家にじっとしているよりは気合が違いますね。主人も、働けば、と」というように、働き出したことによって、矢吹さん自身の生活の姿勢だけでなく妻の労働に対する夫の考えが変化したことが語られている。それは「経済面ですね。子どもにお金がかかっていますから。主人の会社がいまボーナスもないですし給料が減っているので、

ちょうどお金の要るときに」というように子どもの教育費が特に必要な時期の夫の減収という事情が背景にある。さらに単身赴任による家事の経験も夫の変化の原因の一つだろう。「今まで家事をしなかったのを、言えばしてくれるようになりました」または「主人、最近ほんと言わなくなりましたね。私、けっこう泊まりで遊びにいたり。なにも言わないですね」等の語りからわかるように、夫は家事をするようになり、妻を拘束するようなことも少なくなったのである。

夫の性別役割分業観に失望した時期をやりすごし、夫と対等ではないと自覚しつつも、現在矢吹さんは「なんかすごく幸せそうにみえると言われて。私も好きなことさせてもらっているんですよ。だから、ご主人はすごく寛大な方なんだねとよく言われ、あれっ、そうかしらという」状況だ。

3. 二つのケースに見られる夫婦の性別役割分業が維持される要因

本節でとりあげたのは、いずれも典型的な「夫は稼ぎ手、妻は家事育児」という夫婦の性別役割分業をもとにしたライフスタイルを実践しているケースである。

仁科さんは、性別役割分業を積極的に受容し、母親役割意識を内面化するとともに、子どもの存在を結婚の最大の意義と考えている。また、自らが家事・育児専門母として生活できたのは夫のおかげだという意識があるので夫婦は平等ではなく夫は立てるべき存在と認識されている。しかしその一方で、子どもを育て上げ、夫の両親の介護を担うことで、一応の夫婦の対等性を実現させていると考えてもいる。仁科さんのケースは第2章で明らかになった、夫婦の性別役割分業を維持することと夫婦の対等な関係は両立が可能という傾向の典型例であろう。

しかし言うまでもなく、性別役割分業は単なる分業ではなく、性に基づく役割が同等ではないことに問題があり、そのことが夫婦の対等性に影響を及ぼすと考えられるのであって、夫婦の性別役割分業の維持と夫婦の対等な関係性が両立可能という考えは本来矛盾を含んでいる。それが仁科さんの場合に特に問題として意識されない要因のひとつは夫との「淡々とした」関係である。夫とは仲が悪いわけではないが互いに干渉せず接触の機会も少ない。つまり、関係性が希薄であれば対等性が問題と認識される機会も少ないのである。

他方、矢吹さんも基本的には夫婦の性別役割分業をもとにした生活をしており、育児に専念できる環境に満足してはいるが、ただ、家事・育児は夫も担うべきだと考えている。従って夫の協力を期待して、応じない夫に不満を抱えることになった。とは言え、夫に養われる主婦という自らの置かれた位置について自覚的であるため、夫と対等であるとは考えていない。その一方で、対等であることを追求しないということを女性の「甘え」と位置付け、そうした考えが女性なら許されるとも考えている。このように女性に許される「甘え」という思考を経由することで、夫婦の性別役割分業は問題ではなくなり、抑圧や葛藤といったことも意識しないですむ。さらに子育て終了期に働き始め、家計にある程度貢献

できるようになったことで、夫婦の対等性も一定程度維持されていると考えてもいる。

以上のようなプロセスによって、上記2ケースでは夫婦の性別役割分業に基づいたライフスタイルが選択され維持されていた。しかも両者はこうした生活に満足感を得ているので、生活の中で性別役割分業が解体される可能性は低い。

第2節 夫婦の性別役割分業に抵抗している／性別役割分業を変容させるケース

本節では夫婦の性別役割分業に抵抗しつつ実態としては一時的に受け入れた岩崎さんのケースと、表面上は性別役割分業夫婦の妻に見えるが、性別役割分業にとらわれずに生きる三浦さんのケースをとりあげる。

1. 夫婦の性別役割分業に抵抗しているケース

岩崎さんは50代半ばを超える年齢で、家族は医療専門職の夫と大学生の子どもたちという構成である。30歳で結婚し、子育て期は専業主婦として過ごし、子育て終了期からは結婚前に従事していた美術関係の著述・展示のプロデュースを再開している。意識レベルでは性別役割分業を拒みながら生きてきた女性である。

実家は地方の裕福な家で、岩崎さんの幼少時には、当時の言葉で言えば「女中や下男」がいたため、家事は女性がやるものと思うことなく育った。両親を見ても父の仕事を手伝っていた母が家事をすることはなく、さらに家業を仕切ってきた祖母の話聞いて育ったこともあって、女性が家事を担っていたとしても、それは個々の事情によるものだと思っていた時期がある。

そうした環境で育ったため、「あまりかけ離れた考えの人とは結婚できない」と考え、特に「家事は女がするものと思っている人」及び「男が常に上という考えの人」とは結婚どころか「話をするのも無理」だと思っていた。結婚そのものについても「周囲の友人・知人には喧嘩をする夫婦が多く、結婚して離婚した友人もいて、早まったことをしたくない」と思い、「自分のすべてをかけて結婚する」などという考えは論外だと考えていた。

したがって、長男で一人息子の男性から求婚された際には、「あの時代に、あの地域では、こういう人と結婚するのは大変かと思った。しなくていい苦労はしたくないタイプなので」とかなり躊躇した。しかし相手の男性は2歳年少だったので柔軟な考え方ができるのではないかと期待し、条件を2点提示した。それは「実家を出て嫁に行くという考え方はしないこと」と「子どもができなくても自然に任せる」という内容で、相手が2点を了承したので結婚を決意した。

こうした考えをもつ岩崎さんは婚姻届についても、「お嫁に行く」のではないので姓は変えないと意思表示したのだが、夫の実家では「嫁にもらった、嫁にやった」という意識が

強く反発があり「届けを出す時に譲歩して夫の姓になってあげると言った」という結果になった。それでも、海外の教会で挙式した際に渡された結婚証明書には、夫婦別々の姓名が記載されており、それが嬉しかったという記憶がある。

結婚生活が始まり、2年後には長子が生まれた。結婚前は子ども好きではなかったものの、「子どもをもててよかった。親にしてもらったという気持ちがある」と語っている。特に30代なかばで父親が他界した際には、子どもたちの存在によって、その辛さを乗り越えることができたと思っている。その一方で問題もあった。一つが結婚を決断する際に懸念していた婚家の価値観である。改姓の件だけでなく、婚家では伝統的家族観が強固であり、実家では言われたことのないような、義父の女性を見下す発言に悩まされた。この件は「そういうことを夫に言うとう夫がかわいそうなので」と我慢したが、長男が生まれたにも関わらず、もう一人男子を産むようにと言われた際の驚きと違和感は大きく、この件は夫に告げざるをえなかった。

もう一つの問題は想像以上の夫の過重労働である。夫の仕事が多忙を極めたため、結局家事・育児は全て岩崎さん一人で担うことになった。「夫の仕事がそんなにすごいとは思わなかった。拘束時間も長く、夫は疲れきって帰ってくるので、夫の世話をしあげなければならなかった」という状況だった。同時に「結婚当初は、夫はほとんどいなかったの、家のことは何でも自分でしなければならなかった」という。「何でも」の中には家事の中でも男性の役割とされているような大工仕事等も含まれており、それ以外にも古い家には「ムカデが出たりナメクジが出たり蛇が出たり。それ私が全部始末しました」ということもあった。こうした経験から家のことは「何でもできる」様になり、また「強くなった」とも語っている。夫の協力が全く得られない中で一手に家事・育児を引き受けていた様子がわかる。

夫がこのように多忙だったため、特に子どもが生まれてからは、「仕事を続けるのは無理」だということが分かった。こうした状況に不満がないわけではない。しかし「自分が家事をして夫が収入を持ってくるということは承知で結婚したのだから、自分が選んだことなので」と納得はしている。またそれは家庭運営を効率よく実行するということでもあって、家庭運営上の分業だということになる。つまり性別役割分業ではなく、単なる分業として家事育児をしているということだ。したがって特に不満は感じない。

そうした状況は子育て終了期になって、仕事を再開した後も基本的に変化はなく、現在では「母の面倒をみつつ、仕事をしていて、家事もやって（それも）嫌いではない」という生活である。このように考える岩崎さんにとって夫婦の対等性とは互いの経済的自立であり「色々な問題はそこから派生してくるので」と考えている。現在は仕事があり、収入がある。収入だけではなく直接に社会と関わることで、社会的責任が生じ、その結果、社会人として夫と対等になれたと岩崎さんは考える。専業主婦だった時期に、特に卑屈になり、あるいは夫が高圧的にふるまっていたわけではないが、「それぞれに収入がないと、対

等ではなかったんだろうなと、今になって思う」。収入と社会に直接つながることが夫婦の対等性にとっての基本だという認識である。

このような考え方をしているが、岩崎さんは女性のライフスタイルは多様であっていいと考えている。「結婚も出産もしてもいいし、しなくてもいいと思っている。人の事はとやかくいう事ではない。強要してもいけないと思う。自分はたまたま結婚してたまたま子どもをもてたというだけのこと」と最後に語った。

2. 夫婦の性別役割分業を変容させるケース

三浦さんは自宅の1室を用いて美容関係の施設を経営している30代の女性である。高校卒業後数年間営業職で働き、23歳で結婚した後も職場に留まって3年間働き続け、長子出産を機に退職した。夫は8歳年長の同じ職場の大卒男性で、知りあって2年後に3年間交際し、互いの家族とも親しくなった頃を見計らって結婚した。三浦さんは性別役割分業型夫婦の妻のようにみえるが、実際は、意識の上でも実態も性別役割分業からかなりの程度で自由に生きる女性である。

仲の良い両親の下で育ったために結婚前の理想の夫婦像は両親だった。また、中学生の頃まで母親が専業主婦だった影響で、自らも子どもの幼児期には母親が傍らにいるような家庭を漠然とイメージしていた。とは言え、必ずしも専業主婦を望んでいたわけではなく、一方では子どもを産んでも働き続け、「結婚前も仕事はバリバリとやっていたので、ゼロにはできないと思っていた」と、家庭と仕事を両立させようという気持ちが強かった。

しかし結婚前に父親の突然の死去という事態に直面し、自らの生き方を見つめ直すようになった。「家庭も仕事もバリバリやる、という理想は無理だと分かった。独身ならバリバリやっても人に迷惑かけないが、家庭をめちゃくちゃにしてまで働かなくてもいい」と思い定め、「あと30年あるなら好きな仕事をした方がいい」と考えるようになった。しかし、これといった資格を持たないことに改めて気づき、勧められるままに義母が経営する美容関係施設を手伝うことになった。研修などを受けつつ技術力を高め、6年ほど義母と共に働いた。その後、長子が小学校に入る頃には、住居の1室を施設に改装して独立した。「家庭も仕事も両立させてバリバリとやろうと思っていた」三浦さんは、まずは「家の事」、つまり家事・育児を優先させ、以前に考えていた7割程度の仕事量で働くことにした。実際には平日で保育所が子どもを預かってくれる間だけ予約を受け付けている。このように家事・育児と両立させて「バリバリ」働くというライフスタイルを見直し、家族中心の生活を順調に築いているようにみえる三浦さんには、父親との死別の他にいくつかの試練があった。

まず、結婚5カ月前に夫の多額の負債が判明した。夫は、「持っていたら持っているだけ使うタイプ」であり「給料30から40万円もらっていて足りない生活していた」ということが後に分かった。三浦さんは「この人と結婚して大丈夫かなと心配にはなったが、全く

何もない人はいないかな」と考えなおして結局は結婚に踏み切った。金額を聞いて「ひとりで返せないで、こんな額になったんだろう」と推測し、両親には心配させまいとして告げることができなかったが、反面「そのくらいなら返せるかな」という自信もあった。結局負債は結婚前から返済し始め、長子出産前に完済した。「本当は借金を自分のお金で返せたのだが、半分を返して、半分は夫から返させるようにした」と、反省を促すために、意図的に半額は残して夫自ら払うようにし向け、「(次に)借金をしたら離婚という約束」をさせた。このような成り行きで、「結婚してから家計を握ろうと」思っていた三浦さんは、負債が判明した時点で夫の収入を「没収」することにしたという。

次の試練は、長子が月齢8カ月という頃に、夫が失業したことだった。家族にとって困難な局面ではあるが、三浦さん自身も一応は働いていたので、この時も慌てず「心の中で(夫が)仕事ができなければ、私が稼げばいい」と考えていた。両親など周囲は憂慮していたが、急いで次の仕事を決めなくても、「どうせ働かなければならないし、いよいよとなれば立ち上がるだろう」と夫を信頼し、失業中に旅行に連れだすなどして気分転換できるように配慮し、あるいは「焦らなくていいよ」と励まし続けた。その後再就職した夫から、結婚記念日に「普通の女性だったら逃げ出していたらに、逃げる人もいる中で、(逃げずにいてくれて)ありがとう」と感謝の気持ちが伝えられたという。

こうして二つの難局を乗り越えてきた後に、今度は母親の負債を夫が肩代わりするという事態に直面した。義父母は30年ほど前から別居しており、親戚縁者の冠婚葬祭にのみ共に出席するといった関係であり、姉弟もいるが遠隔地に住んでいるため、結局は長男で近くにいる夫が肩代わりするという事態が生じたのだ。「この時にはさすがに子どもを3人連れて一人で歩こうかとまで考えたが、一人では大変だなと思ってやめた」と、一時は離婚も検討したものの、ひとり親の育児の困難を考えて思いとどまった。結果的に、10年程度の期間を設けて店舗兼住宅を改装し、事業として拡張する計画は当面見送らざるを得なくなった。しかし、計画を全く諦めたわけではなく、「将来は古民家を一軒借りて、美容関係の施設とカフェをやりたいと思っている。美容関係施設があって、楽しいイベントがあって、話したい人たちの空間で、食べてきれいになって、子どもたちの施設でもあるような」という夢は捨てていない。

このように、実質上家庭運営を取り仕切ってきた三浦さんにとって、夫婦の性別役割分業は特に意味を持たないようにみえる。あえて取り上げれば、「夫は本心では私に家においてほしい」と思っており、「私も(今は)できれば専業主婦でやりたい。最低限の生活費があればいい。子どもが小さいうちは今のよう形で」と育児を重視したい考えである。しかしこうした考えは将来的に事業を拡張して収入増が見込めることに基づく一時的なものという意識がある。

したがって現在でも夫の家事・育児分担は夫婦の合意事項だ。「旦那さんはわりと手伝う方だと思う。子どもと遊んだり絵本を読んだりもする。トイレや洗面所、お風呂なんかは

磨いてくれる」というように夫は子どもの扱いが上手く、掃除が得意である。それは夫をそのように仕向けたからであり、「うまいこと手伝ってくれる旦那さんになってくれた」というものだ。三浦さんの性別役割分業観は家事・育児に関しては「性別に関係なく、気になる人がやればいいよねっていう感じ」という言葉に端的に表れている。しかも、以下の語りには、性別役割分業意識を越えて、男はこう、女はこうといったジェンダー観がゆらいでいる様子まで見ることもできる。

旦那さんは今度所長にという話を断ったらしい。転勤になると困るので出世はしなくていいと言っている。子どもと離れたくないので、断っていると言っていた。仕事にやる気がないみたいに聞こえるので、全部を否定するような言い方はやめようよと言ってやった。

夫は男性中心社会の中での職業上の評価よりも家族と過ごす時間を選び、妻が男性社会の価値観をもとに夫を諭しているという従来のジェンダーが逆転したかのような構図である。このような日常を生きている三浦さんが考える夫婦の対等性といえば、観念上のことではなく、互いに助け合える実際的な関係性である。

3. 二つのケースにおける夫婦の性別役割分業のゆらぎ

前節では、「夫婦の性別役割分業をもとにしたライフスタイルを選択している」いわば性別役割分業受容型ケースをとりあげた。今回の調査は質的調査であるため明確な区別は難しいが、こうしたケースは比較的多く、本節でとりあげた「夫婦の性別役割分業に抵抗している／性別役割を変容させる」いわば抵抗型ケースは少ない。抵抗型ケースであっても、女性たちが母親意識を内面化しており、子どもの存在を結婚の大きな意義としている点は変わらない。異なるのは、女性たちが夫婦の性別役割分業を否定的に捉えている点である。

岩崎さんは育った環境のせいで結婚前から性別役割分業を否定する考えの持ち主だったが、結局は夫の仕事の関係で家事・育児を全面的に担うことになった。しかしそれは、ある程度予想した上での自らの選択であり、夫婦のどちらか一方が家事・育児をしなければ家庭は成り立たない以上、性別とは関係なく家庭を効率よく運営する上での分担なのだと考えている。しかし夫婦の性別役割分業が単なる分業ではなく、分業の内容価値が異なること、性別によって担う役割が固定化していることが問題なのであって、その点を考慮しない単なる分業という考えは逆に性別役割分業を強化することにもなりかねない。岩崎さんはその点について無自覚なわけではなく、抵抗なく性別役割分業を受け入れるケースと同列ではない。しかも岩崎さんは、夫婦の対等性には、妻も収入と社会性を併せ持つことが必要だと考えており、実際に子育て終了後には、自営業なので可能だったこともあり、

結婚前の職業を再開している。従って、このケースは夫婦の性別役割分業を観念としては拒みつつ、実態としては一時的に受け入れたケースとみられる。

対して、三浦さんのケースは、性別役割分業を拒むといった強い考えを持たない点で岩崎さんのケースとは異なっている。三浦さんにみられるのは夫婦の性別役割分業を取り入れるかと思えば、その内容を変えてしまうといった柔軟性である。また、三浦さんは、母親による育児を重視して、無理のない範囲で賃労働に従事する性別役割分業型夫婦の妻のようでありながら、家族の困難な状況に際しては、一般には夫に期待されるような、問題を打開する能力と精神力を発揮する。三浦さんのケースはいわば従来の性別役割分業観にとらわれない生き方の一例でもあり、観念レベルでも実態においても性別役割分業から自由なライフスタイルとみることができる。そして、こうしたライフスタイルを可能にする要因のひとつは、潜在的な経済力である。自営業の三浦さんは状況に応じてある程度収入を増加させることが可能であり、そのことが生活上の自信にもつながっている。

以上の2ケースで注目されるのは、両者に共通するのが自営業という点である。母親意識が内面化され育児が喜びである二人にとっては、育児との兼ね合いで柔軟に対応できる女性の働き方は重要だった。この2ケースの場合は、柔軟な働き方が夫婦の性別役割分業を変化させる潜在性をもっていたと考えることもできよう。

第3節 離婚に至ったケース

本調査では、離婚に至った女性が5名（再婚者1名を含む）いた。多くの女性が、たとえ不満があったとして夫婦間の性別役割分業を受け入れ、何らかの形で夫婦の対等な関係を保って結婚生活を続けていた中で、本節では離婚を選択した女性たちのケースを2例取り上げる。結婚に何を求めていたのか、性別役割分業に関してどう思っていたのか、夫婦の関係をどうしたいと思っていたのか、彼女たちの語りを手がかりにしてみたい。

1. 夫婦の性別役割分業を実践していなかったケース

田中さんは30代で結婚し、数年後に離婚した。結婚前から会社員として働き続け、現在は子ども一人と暮らしている。

30歳を過ぎると周りから結婚をせかされるようになったが、本人は仕事が面白いこともあり、強い結婚願望はなかった。しかし、妊娠をきっかけとして、結婚することとなった。婚姻届を出すのも「うれしかったか」といって、入れなくちゃいけないなという、どっちかといって入れなくちゃいけないなという感じ」だったという。しかし、逆に結婚に対して抵抗感があった訳でもない。なんだかんだと「後回し後回しになって行ったというだけ」であり、さらに結婚に伴う改姓に対しても「べつにあまり、それは当然というか」自然な成り行きと捉えていた。

田中さんが結婚に期待していたのは、漠然としたものではあったが、自分が子どもころの家庭とは違った「会話が弾む明るい家庭」であった。

明確な細かい事柄での理想というのはなかったのですが、もともとというか、私の育った家庭は両親が共働きで、それは全然問題ないんですけど、なんていうんでしょう、大きくなるにつれて全然会話がなような家庭になっちゃったんですね。

お父さんが孤立というか、個々が孤立みたい。お母さんはそういう人じゃなくて、ほんとにごくみんなでわいわいしたい人だけど、だけとお母さんもすごい仕事人間で、ほぼ休みがないような人だったんですね。それに（母は）ほとんど家にいないような状況で、子どもたちも外では明るいけれど、うちでは暗いみたい。そんなだったので、とにかく会話がはずむような家庭をつくりたいとは思っていたんですが、夢かなわずという感じではあったんですけどね。

仕事が好きで、結婚しても退職は考えなかった。家事に関しても、固定的な性別役割分業ではなく夫婦で協力してやっていこうと思っていたが、結婚してから実際にはなかなかそうはいかないことに気付いたと言う。

（「夫は仕事で妻は家庭」というような）そういう分担じゃなくて、二人でできることをできるように、お互いにご飯をつくるのも時間があるほうがつくるとかというふうに結婚する前は思っていたんですけど、実際に試みて、やっぱり男の人がご飯をつくるのかというのは難しい。好きであればべつですけど、ちょっと無理なんだろうなと。

夫は家事ができない訳ではなかった。独身時代が長く料理もしていた。しかし、夫が作る料理は「家族の食卓に出せるようなものではないもの」だった。

（夫が作るものは料理と）言うようなものではないので。むき海老をそのまま蒸しましたとか、「いやいや、いらないです」みたいな感じのものしかできないので、あんまり……。しないからどうとかいう、それはしょうがないだろうなとか、得意なことをしてくれればいいんだろうなというふうに結婚していたときは思ったんですけど。

夫は家事をするように親からしつけられていなかったようであった。夫の実家を訪ねた時も、夫は年老いた母に面倒を見てもらい、自らは何もしようとしなかった。

なにもしなかったですよ、実家にいっても。お母さんは70歳とかですけど、手伝おうと思うじゃないですか。布団の直し場所がわからないとか、そういう状態。

うわっ、お母さん70歳なのにつて。お母さんも、だからよくないんだと思うんですけどね。だか

ら、そんなことについてべつに言わなかったんですよね。おかしいんじゃないのとか、思っていたけど。

夫の家事能力の低さに対して疑問を持ったものの、それをあえて夫に指摘することはせず、あきらめて受け入れていた。他方、夫が経済的な責任も妻以上に負っていたかと言えば、そうではない。田中さんが仕事を続けていたのは、自分がそうしたいからという理由と共に、夫の収入が安定していなかったという理由が大きかった。

しかし、妻が結婚後も仕事を続けることに対して、夫は消極的であった。

(夫は)「子どももいるのに仕事を休めばいいのに」というか、思っていたみたいですけど。

【「おれが稼いできてやるから」という感じですか?】という感じでもなかったんですよね。じゃあどうするのと言うと、「緊急事態だから親に借りればいいじゃない」とか(言うので、私は)「いや、だめでしょう」と。

結婚生活の中で、結婚して良かったことは何だったかという問いに対する田中さんの答えは、「うわっ、良かったことですか?良かったこと、なんだろうな」であり、すぐには思いつかなかったようであった。問いかけを重ねていくと、「うちはあるとすれば子どもができたことなのかなと思いますけどね」と、子どもを得たことを挙げた。

結婚前に描いていたような結婚生活には、なかなかならなかった。子育てに関しても、夫はあまり積極的でなかった。妻が仕事で遅くなっても、夫は「夕飯は自分だけの分をつくって食べていたりするような」人だった。マイペースな夫に対し、妻はフルタイムの仕事をしながら子どもを保育園に通わせ、また一時的な預かりを近所の人に頼み、なんとかやり繰りをしていた。

そういった生活の中で、田中さんは夫婦でいることが負担になってきてしまった。

理想とのギャップというか、ほんとは明るい家庭をつくりたいのに、自分がきつと明るくすればいいんですけど、それができない。相手にイライラして。そんなことやったら、(結婚なんか) いっそしなかったら良かったかねとは思いましたがね。

そして数年後、離婚という結果になった。主な理由は夫の収入の不安定さだが、それだけではないという。

まず大きい理由といえば経済的なことになってしまいますが、もともとわかっていて結婚したことではあるんですけど、それでもがんばろうとしてくれれば、たぶん良かったんですけど。

というのと、あとどっちかというと、それよりも日々の価値観の違いというか、ほんとに細かい話

で恥ずかしいですけど。電話がかかってきてテレビを見ていたら、ふつうテレビの音を小さくするのはなのに、自分が聞こえなくなるから大きくしたりとか、気が回らないんです。いま思えば、ずっと一人で暮らしていたからそうなのかもしれないんですけど。妊娠中はエレベーターでおりにゃないですか。(でも、夫は)「階段のほうが速い、階段で降りようか」と(言う)。「ふつう違うでしょう」というようなことの積み重ねなのかな。

田中さんから見れば、夫は独身の頃の感覚のまま結婚生活を送っているようであった。子育てと仕事の両立に奔走する妻に対し、夫は仕事が不定期で時間的に割合自由がきく状況でありながら、家庭責任を果たすことにはあまり興味が無い。経済的な責任を積極的に果たそうとする気もない。さらに、田中さんは「気が回らない」という表現を何度も使い、夫との精神的なすれ違いが離婚に結び付いていったと語った。

その一方で、自分にも結婚生活は難しいと感じた点があったという。

(結婚すると、日々の生活で相手に合わせなければならないことも出てくるが)私、それがだめだったんですよ、自分自身が。相手の欠点ばかりというわけでもなく、人に合わせなくちゃいけないというのが合わせられなかったんですね。だから、ふつう買い物に出るといったら、(夫も)一緒に行こうとなるんですけど、いやで、一人で行きたい、ちょっと買い物に行ってくるとか。

私も仕事をしてきたから、正直、何時に帰って来られるのかもわからないというのもあって、でも、相手は待っているかもしれないとか、そんなことを考えるのもいやで、ああ面倒くさいな、になっちゃったんですよ。

結局もともと育った家庭と同じような状況になってしまって、思っただけでも何も言わない。面倒くさいんですよ、あとでそこでもめるのも面倒くさいし。黙っておこうぐらいな。それが結局積み積もって、一番最初に出た言葉が、「もう別れよう」みたいな感じだったので。

いろいろと不満がある夫婦関係だったが、それを夫に言うことはなく、そのまま心の中にため込み続けてしまい、限界に達した時によりやく口にしたのが離婚の提案だった。後になってみれば、「ため込みは良くないかもしれない」と思う。

夫に言いたい事を言うのが「面倒くさかった」という田中さんにとって、夫との関係は対等なものであったのだろうか。

対等、うーん、どうでしょう、対等?あまり意識したことないですね。ないということはそうなんじゃないかな。それも良くないのかもしれないんですけどね。(夫を)立てようとしたこともないです。立てなかったから、それは良くなかったかもしれないですね。

田中さんにとって、「対等な夫婦関係」という言葉はあまりピンとこないようであった。

「夫を立てる」という行為にも関心がなかったが、今になって思えば夫はそうしてほしかったのではないかとも思う。

田中さんのイメージでは、「夫を立てる」というのは、具体的には「子どもに対して、お父さんはすごいんだという意識をもってもらえるようにすること」であった。夫は積極的に子育てに参加したわけではなかったが、子どもとの関係は良好だと言う。離婚後の夫と子どもとの関係を見ていて、父親には母親と違った役割があるのではないかと思うようになった。

やっぱりお父さんの役割、お母さんの役割というはあるんだろうなというふうに思うんですね。やる事柄ではないんですけど、精神的な面というか、というふうには思いますね。働いてくるのが男の人、家事は女の人とかいう分け方ではなくて、子どもに対しての母親の愛情と、父親からの愛情というのは子どもにとっては違うし、そういう意味での役割分担というのは必要なんだろうなと思いますね。

【父の愛情と母の愛情というのはどういうふうに違うとお感じですか】。

なんででしょうね、なんていうんでしょうか、母親に対してはなんの抵抗もなく、とにかくお母さんは必要なだと思ってるんですね。いるだけでというような。だけど、父親とはひと月に一回ぐらいしか会ってないんですけど。私（母親）だけでよければ別に会いたいとかいうわけではないでしょう。だけど、（子どもは）「なんで一緒に暮らさんの？」みたいなことを言うてる。じゃあ、やっぱり（子どもにとって父親も）必要なだと思って。正直、父親の役割も母親の役割も（自分が）できるだろうと思っていたんですけど、でも、やっぱり子どもにとっては違うんだと思って。

しかし、離婚しなければ良かったと思うことはない。母子の暮らしは経済的に苦しいという問題はあるが、その点に関しては「旦那と一緒にいても一緒だった」ので、別れても変わらないと言う。

2. 夫婦の性別役割分業を実践していたケース

高橋さんは 50 代で、現在は専門職に就いている。短大卒業後に海外で就職したが、20 代後半に帰国して自営業の夫と結婚した。

高橋さんにとって、結婚することは自然なことであった。

結婚は、まあ、したいとは思っていましたが。とにかく子どもが好きなので、子どもがほしいというところで、結婚はいつかするだろうという感じで。

海外にいた頃は、周りの人々からは「まだ 20 代後半」（なのでまだ結婚するには早い）という反応が一般的だったのでのんびり構えていたが、帰国後は「もう 20 代後半」と言わ

れ、30歳ぐらいまでに結婚しなければいけないのかというプレッシャーをすごく感じたと言う。

帰国してから数年して出会いがあった。結婚を決意したが、その時に決定的だったのが、相手の職業が自営業だったということであった。「何かを自分でやっている人を、自分は支えたいというのが願望としてあった」と言う。

会社員だったら、たぶん絶対結婚しないですよ。何かやって、何か自分でつくっていったりする人がすごく、で、その支えになりたいみたいなのがあったのが一つの理由です。そして結婚生活は、たぶんそういう彼の仕事を支えながら、結構いろんな人と仲良くなれるタイプなので、向こうのご両親とかとも、嫁姑とか全然なくて、すごく楽しくやっていくんだろうなって。

結婚当初、夫は海外で仕事をしている妻を「すごく輝いている」と褒め、自分もいつか海外で仕事ができるように頑張ると言っていた。夫の両親は農家を営んでおり、「すごく保守的な典型的な田舎の考え方」を持っていたが、そういった家庭に育った夫と結婚することに抵抗はなかったと言う。しかし、それは保守的な家に嫁に入る、といったことを望んでいたわけではなかった。

そこに私が入ることで新しい風を起こすんじゃないかぐらいの勢いだったんですよね。

【あちらの家風に染まろうとは思ってなかったんですね】

思っていないですよ。何かきつと変わるぞ、ここ、みたいな、楽しいことが起こるからね、今から、みたいな感じではいましたね。

夫側からは、将来的には夫の両親との同居を望まれたが、それに対しても抵抗はなかった。義両親との同居に対して高橋さんの母親は心配したが、自分としては「全然楽しくいけるぞ、みたいな感じ」で、むしろ乗り気であったと言う。

結婚後は仕事を辞めて専業主婦になった。結婚に際して仕事を辞めることには、あまり抵抗はなかった。

この仕事を続けるという仕事に出会ってなかったのもあって。無計画だったので。日本に帰ってきたのも突然決めたような感じだったので、たぶんすごくこの仕事が好きっていうのをやっていたら、また違ったと思うんですけど、そこを見つけてない前に出会って結婚のほうにいったので、彼の仕事を支えるというところに自分の仕事としての居場所を見つけていた感じはしますね。そこですごく発揮するだろうな、自分の能力みたいな。

夫の仕事を支えるという「仕事」を自分がすべきことだと決め、頑張ろうと意気込んだ。

夫も妻に家事を丸投げするのではなく、多少は協力してくれた。

妊娠中で、つわりのときは手伝ってもらったり、茶碗洗ったりとかですけどね。言えば、いやという人ではなかった。全然やらないという感じではなかったのです。

しかし、結婚後、相変わらず保守的な夫の両親や親戚に対して、次第に違和感を覚えるようになっていった。例えば、娘が生まれた時に義両親は喜びながらも、「男の子じゃない」ので少々期待外れ、といった態度を示していた。息子の誕生に対しては盛大なお祝いをしてくれたが、子どもが生まれたことを喜んでくれているというより、「後継ぎ」ができたことを喜んでいようであった。

さらに、結婚当初は妻に「そのままいてくれ」と言っていた夫の態度も変わっていった。

長女が生まれてすぐに「妻」から「嫁」に彼の態度がシフトしてきたんですね。決定的だったのが、「おれはお前たちより親が大事だから」と言ったので。すごいでしょ。じゃあもう、結婚って成り立たないよねという話ですよ。

高橋さんは、妻の意向よりも義両親や親戚を優先する夫に次第に失望していった。「結婚生活において我慢したことと、もしくは結婚しなければ良かったことは何か」という問いに対して、高橋さんは夫に否定された経験を語った。

我慢したことは、どうだろうな。我慢ってあんまり思っていなかったかもなあ。できることを尽くしてとか、でも、そうだな、家事のことをいろいろ言われるんですね。掃除をしても、結局彼にしてみれば、してないと言われてたり、その基準が違ったりして。最終的にはけんかするときもそうだったんですけど、要は自分でやっていることをだめって言われると、だめなんだと思ってやらなきゃいけないというのは、ある程度我慢というか自分を押し殺して彼に合わせるみたいなのは、やりましたよね。「あ、だめなんだ」みたいな。

せめて、味方になってくれなくてもいいから、中立でいてくれたらそれでよかったんですけど、実家に帰るたびに私の立場が悪くなるようなことばかり言ったりしたりするんですよ。向こうは、すごくいい息子というのが大事なので。

両親や親戚に妻が何か言われていたとしても、夫が妻をかばうことはなかったと言う。う。そういった中で、対等な夫婦関係などは無理であった。そもそも、夫にとって妻はパートナーではなく、「夫の家に入った嫁」といった意識がすごく強かったと言う。

まるきし対等ではなかったと思いますね。例えば週末とかにしても、実家に帰ると言われればついていったりとか、自分の気持ちを抑えることは多かったと思うんです。二人の関係においては、お互いさまといわれると思うけれども、実際に家族とか周りの人たちを見たときに、やっぱり「嫁だから」みたいなところですべて言われて、というところがあるので、そういう意味では対等ではなかったかなと思いますね。

夫は妻が夜に友人に会うために、子どもを置いて出かけることも嫌がった。夫婦の間にすれ違いが広がっていき、やがて別居生活をするようになった。収入のなかった高橋さんは、まずは経済的な問題に直面することとなった。夫は自分の銀行口座を変更してしまい、妻は生活費をおろすことができなくなってしまった。まだ離婚していなかったので母子手当などの手続きも出来ず、独身時代に貯めていた貯金を切り崩したりしてなんとか母子の生活を維持した。

しかし、苦しむ母親の姿を子どもに見せてはいけないと思い、子どものために笑っていなければと思った。父親を失った子どもに、母親も仕事で忙しくて子どもと一緒にいてあげられないというようなことにはしたくなかった。なるべく子どもと一緒にいられる時間を持てる仕事を探した。

性格だと思うんですけど、楽しくなきゃイヤなわけですよ。自分が我慢して苦しんでいるのは絶対子どもにとってよくないと思っているので、笑っているお母さんでいてあげることしか考えてなくて。ですので、すぐ仕事をしなきゃいけないのだけど、ただでさえ父親がいなくなって、これでもたお母さんが仕事を始めて子どもだけという時間になるのが耐えられないと思って、ずっと子どもといられるような仕事を模索してみたり結構やってみましたね。

(経済的な不安に対して) 深く考えてないんですよ。なんだろうな。どうにかなるとは思ってましたね。例えば三つ四つパートとか、そういうのを掛け持ちしてでも経済的なことはやっていこうというのもちろんあるんだけど、その反面、子どもだけにするのも(心配)というのはありましたね。でも離婚するときは、このままだと私自身の心がだめになるみたいなのが大きかったかなあ。

別居して一年後に、子どもはすべて高橋さんが引き取って離婚した。

「今振り返ってみて結婚して良かったと思うことは何か」という問いには、「子どもに出会えたこと」と答えた。結婚当初は、夫の存在に対して「頼れる人がいるというのはすごくいいとか、安らぎだったり、経済的な安心感だったり」という気持ちがあり、それも結婚して良かったことだと感じていたが、この感情は徐々に消えていってしまった。

離婚した際に一番怖かったのは、夫側が子どもを引き取りたいと言い出すのではないかということだった。夫は子どもたちにとっては良い父親だったという。

(夫は子育てに参加しなかったということ)はないですね。言えば何でもしてくれる感じの人だったので。おむつ替えたりも言えばしてくれていたし。気がつかないだけなので。いい父親だったと思います。

離婚して経済的に苦しくなり子どもにつらい思いをさせてしまうのではという不安もあったが、夫や義理の家族からつらく当たられることが続き、別居一年後には、「何もやり残し感がないというか、私はやるだけやった」と離婚を受け入れる心境に達したと言う。

基本添い遂げたかったんですよ。一人の人に添い遂げるというのはずっと夢だったので。わりと古風なんです。それがかなわないのはさびしいし、だんだん年をとってきて、一緒に苦勞した時代とか共に過ごしたのを振り返る人がいないというのはちょっとさびしいんですよ。

夫の両親や親族などが絡んでこないような形であれば、また結婚しても良いと思う。

3. 離婚に至った要因

田中さんも高橋さんも、結婚に対して抱いていたイメージは、夫に尽くす妻といった夫婦の関係ではなく、二人で作りに上げていく「明るく会話が弾む家庭」「楽しい家庭」であった。

田中さんは結婚後も就業を続け、固定的な性別役割分業ではない夫婦の形をとった。しかし、それは収入を得る労働と家庭内労働を夫婦で平等に分担するというのではなく、結果的にはどちらも妻がその多くを負担するという形となってしまった。田中さんは夫に家事・育児の分担を強く求めていたわけではない。男性が家事育児に積極的ではないことに対し、仕方ないと考えて諦めていた。しかし、夫は「夫は仕事」さえもきちんと担わないし、負担が多い妻に気を使うこともない。夫は稼いで妻子を養い、妻は家事育児を一手に引き受け、夫婦で協力して家庭を築くといったような、性別役割分業を前提とした夫婦間の「対等」な関係も成り立たない。夫に対して不満をぶつければ諍いになってしまうかもしれない、「明るく会話が弾む家庭」から離れてしまうと考える妻は、不満をひたすら溜め込み、結婚生活は終わってしまった。

高橋さんは結婚の時に仕事を辞め、自営業の夫を支えていくことを自分の役割として見出した。保守的な夫の両親や親族も、自らが新しい風を吹き込んで変えていくという意欲があった。固定的な性別役割分業型の夫婦として出発したが、妻は共に頑張って新しい家庭を築いていくパートナーという形として捉えていた。しかし、夫にとっては、妻は嫁であった。夫が望んでいたのは「義両親に仕えるよくできた嫁」であり、親子関係より夫婦関係を優先するのが当然と考える妻とは相いれなかった。

どちらの夫も、夫は自発的に、自分のやるべきこととして家事や育児をこなすということとはあまりなかった。全くやらないわけではなかったが、「言えばやる。頼めばやる」という共通性があった。妻の側から見ると、夫は「気が回らないだけ」「気が付かないだけ」であり、夫による家庭内労働の遂行は「妻が頼んでやってもらうもの」であった。

二人とも結婚して良かったことは「子どもを得たこと」と答えた。どちらの夫も子どもとは比較的良い関係であり、離婚によってその関係を壊してしまうことに躊躇があった。子どもにとって悪い父親であれば早く踏ん切りをつけることができるかもしれないが、父子の関係に危機的なものがないとなると、「妻が我慢すれば家庭はうまくいく」となってしまう。結婚生活を持続するためには、不満があっても妻はひたすら呑み込むのが良いという価値観を、田中さんも高橋さんも、内面化していたようである。

固定的な夫婦の性別役割分業は、単に「夫は仕事、妻は家庭」という担当分野の違いではなく、そこには夫の側に権力を付与するという関係が存在している。また、家庭を「職場」とする妻には夫に対する精神的な支援が期待されており、妻の側からの主張や反論は想定されていない。本節のケースでは、性別役割分業が夫婦それぞれの「特性」を尊重して良い関係を構築するとはならず、また性別役割分業が内包している夫婦の上下関係に妻が葛藤を感じたことが、離婚という結果の一因となっているようである。

第5章 結論

第1節 夫婦間の性別役割分業が維持されていく要因

本調査では、日本において「夫は仕事、妻は家庭」という固定的な性別役割分業観が維持され続けている要因の一つに、女性自身もそれに対して強い抵抗感を覚えていないことも含まれているのではないかと仮定し、女性たちの意識を探った。調査の結果、明らかになったことを以下述べていく。

第一に、女性たちは結婚における「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業に対して、全体的に結婚前から強く肯定も否定もしておらず、結婚後、基本的には家事や育児を自分の担当として受け入れる傾向にあったということである。

日本における結婚は、そのような性別役割分業の上に成り立った制度であり続けている。第1章第1節で見たように、日本における婚姻は家父長制の名残りをとどめている。夫婦同氏を強制し、妻の就業や社会的活動における改姓の煩わしさは考慮されていない。結婚における改姓に抵抗感を覚える女性は、婚姻届を出さない事実婚を希望する場合もあるが、法律婚主義の日本では婚姻届を出さないことによる不利益は大きい（第1章参照）。本調査でも、結婚改姓を望まなかったため婚姻届を出したくなかったが、事実婚では互いに遺産相続権もなくそういったあいまいな結婚関係には抵抗があったので、諦めて届を出したというケース（東D）があった。婚姻届を出さない夫婦関係にはペナルティが与えられるかのようであり、法的結婚の強制性を示している。

日本の社会保障制度も人は誰でも結婚するという前提で成り立っており、特に女性は「夫に扶養される妻」という立場であることが基本となってしまう。目黒（2000：14）が指摘するように、経済的自立を期待されているのは男性だけである。それはまた、日本の保障制度は結婚していない女性にセーフティネットを用意していないことを意味しており、本調査でも女性たちが結婚して良かったこととして「経済的安定」「精神的安定」を挙げていることにつながっている。結婚しないで一生を過ごすというライフスタイルは女性に不安をもたらし、女性にとって結婚することは当たり前の選択である。

夫婦の性別役割分業は、当然のごとく要求される結婚におけるジェンダー分業として確立してしまっている。つまり、女性たちにとって他の形の夫婦のあり方はイメージしにくく、結婚といえば法律婚で夫の名字に改姓し、夫に扶養され、夫と子どものために居心地の良い家庭を作り上げていくのが妻の役割という意識はほとんど変わっていない。

第二に、母親役割として家庭責任を強く意識していることが、性別役割分業への肯定に結びついていることが明らかになった。「結婚して良かったこと」として、「子ども」という回答が突出しており、「子どもを持つなら結婚は必要」という意識も強く、結婚の枠外

で子どもを持つことへの抵抗や不安が見て取れた。夫に対して不満があるとしても、母親役割の重要性や子育ての喜びを思えば、夫との関係性を調整しながら折り合いをつけていく様子がうかがわれた。また既婚女性にとって、子どもを持つということは単に育児責任が伴うということではなく、自らの人間関係の広がりや人間的な成長につながると捉えられており、「結婚して母になる」という価値観に対して、全体的に強い肯定感が共有されていた。

第1章第3節でみたように、日本の母性主義はいまだ強い影響を持っている。また、結婚・出産・育児は固く結びついており、女性の人生で最も重要な「ライフイベント」であるという認識は一般的にかなり根強く存在している。既婚女性は、当然のように母親になることを期待し、期待される一方、仕事の成果や収入のアップなどは期待されない。むしろ、「仕事なんてしなくても良いのに勝手にやっている」と捉えられてしまう。女性自身も、かなり強く母性主義に絡めとられている。本調査でも、全体的に女性たちは母親役割意識を強く内面化しており、女性自らが、程度の差はあれ、自発的に性別役割分業を受け入れている傾向がみられた。家事・育児に進んで参加することのない夫に苛立ちを覚える女性は多いが、育児に関しては母親の役割や責任が一番だという自負があるので、最終的には「女は家庭」を自ら受け入れていく。夫から見ると、妻が自ら家庭責任を自分がやるべきこととして負っていくので、わざわざ自分が手を出す必要を感じない。

第三に、夫婦間の性別役割分業が、そのまま夫婦を主従関係にするという意識はあまり共有されていないことがわかった。夫婦間の性別役割分業は、女性を強く抑圧・拘束する制度とはもはや意識されておらず、性別役割分業を維持することと夫婦の対等な関係を保つことは両立が可能であると意識されている。夫婦間で収入差がある場合がほとんどであるが、それが必ずしも夫婦の主従関係に結びつくとは意識されておらず、また、経済的な貢献ばかりが対等性に重要と考えられているわけではなかった。妻が夫と同額の収入を得ることが対等な夫婦関係に必要であるという回答は少なく、互いに言いたいことが言える関係や精神的な支えによって良い関係を構築することが、夫婦を対等な関係にする意識していることがわかった。つまり、妻の経済的な劣性は、家庭責任など他の貢献で補充することが可能なのである。

第1章第4節で見たように、夫婦の経済的な対等性は、夫婦関係の対等性を必ずしも保証するものではない。性別役割分業をベースとした結婚のあり方では、たとえ妻の収入が高くても、家庭責任は当然のように妻に要求されてしまう。仕事と家庭の両立は常に妻の問題とされ、夫の問題とはならない。そうなると、経済的責任と家庭責任という二重の負担にあえぐより、経済的責任は夫、家庭責任は妻、と分担した方が「夫婦は対等」と考えるのも無理はない。松田（2000）は、性別役割分業は「夫と妻の役割が歴然としている性別役割分業型の夫婦は、それぞれの役割が決まっているのでコミュニケーションも必要とされず、夫婦関係の希薄化に拍車をかける」と問題点を指摘している（第1章参照）。しか

し本調査では、基本的に「夫は仕事、妻は家庭」という分担になっていたとしても、女性たちには「夫には育児にはもっとかかわってほしい」「夫が稼ぐ分、私の方が家庭内では主導権を握りたい」といった様々な夫に対する要望があり、性別役割分業を維持するためには、むしろ良い関係の構築のためにコミュニケーションを取ろうとしているケースが多くあった。そして、性別役割分業型の夫婦であっても、互いに満足できる良い関係が構築できるとすれば、「対等な夫婦」であるとして、女性たちはそこに何の問題も見出さない。

さらに、本調査においては、東京と比較して熊本と北九州の女性の方が、夫婦のあり方に関して保守的であるという知見は見いだせなかった。東京の女性の方が、熊本や北九州の女性より「対等」な関係を望んでいるという傾向も見られず、どの地域においても、何を持って対等とするかという答えも様々であった。それよりも、各地域の中に多様性があることが明らかになった。例えば、夫の家庭責任の分担に関して、子どもの頃から家事をすることが当たり前の環境で育った夫が、育児も妻以上に担っているという北 J さんのケースがある一方、同じ北九州でも、家事も育児もほとんど参加しない夫に不満があり、「(夫婦で家事も育児も分担している夫婦なんて) 実際周りにそういう夫婦はいない。奥さんに全部負担が行っている」と嘆く北 B さんのケースがあった。また、同じ熊本でも、農家で義両親と同居している女性と、街中で義両親と別居している女性では、夫婦のあり方や妻として期待されている役割も大きく違っていた。全体的に、熊本や北九州の女性の方が、夫や夫の親族などから「嫁役割」を期待される事例が多かったが、女性自身はそういった「夫やその親族に仕える嫁」が期待されていることに対して葛藤や抵抗は覚えても、疑問なくそれを受け入れているという事例はなかった。

第 2 節 性別役割分業観の変化の可能性

本調査では、子どもを持つ既婚女性が夫と同じような経済力をつけて家事育児も同程度分担することに比べれば、「夫は仕事、妻は家庭」というように守備範囲を明確に分けて分担する方が、遥かに現実的な選択と捉えられている傾向が見られた。さらに、たとえ夫と同程度の収入を得ていたとしても、母親規範を強く内面化している女性たちは、家事育児の主な担い手になっていく。夫婦間の性別役割分業は、今や必ずしも社会的にも家庭内においても妻を一方的に従属する立場に追いやっていることを意味しているわけではない。故に、女性からでさえ、その解消を早急に望む声はあまり大きくない。

女性たちは性別役割分業を変えていきたいとは思っていないということになるのだろうか？

本調査では、変化を求めている女性たちも存在していた。特に注目したいのは、妻の全面的な家庭責任に対して全く疑問を持たない夫に対する、主に就業している妻からの抵抗

や反発である。性別役割分業を基本的には受け入れて、家庭責任は主に妻が担うという意識は強いままであっても、夫に家事や育児への参加を全く期待しない女性は少数派であった。母性主義はまだまだ強い影響力を持ってはいるが、父親の育児参加が必要という意識も一般化してきているようであった。

また、第1章第4節で見たように、「男性が稼ぎ手」という意識が強固であり、女性（一般労働者）の平均賃金が男性（一般労働者）の7割に過ぎない現状のままでは、経済的な貢献を夫婦で半々ずつ担うとなると妻の労働時間が長くなってしまう。さらに、育児も含めて家庭責任を果たすのは女性の役割となると、妻の負担が増すばかりである。いっそのこと経済的責任は夫に一任する方が夫婦は対等という認識も強い。しかしながら、既婚女性の就業はもはや当たり前のこととなり、稼ぎがあるということは、多少なりとも夫婦関係に対する妻の意識に自信を与えているというケースが、本調査ではいくつもあった。家庭責任を強く感じながらも、女性の就業への意欲は強い。家庭と仕事の両立を可能にしようと、多くの女性たちは資格を取ったり自ら起業したりなど、結婚後に柔軟な働き方を選択していた。そうすると、次に求められるのは、夫に対していかに家庭責任を自覚させ家事育児をもっと主体的に担うようにさせるか、またそういった男性の家庭進出をいかにして社会が受け入れていくかという課題の克服である。そのあたりから、性別役割分業に変化が見えてくるのではないか。

¹ 女性学における性役割研究は、家庭における夫婦の性役割のみならず、「男が主役で女は補佐」といった社会のあらゆる側面にしみこんでいる「男役割」「女役割」を対象としている（井上 2009）。

² 桜井厚（2002）28頁を参照。

³ ライフストーリー研究では、次のような認識が共有されている。それは実際に起こった出来事や語り手の経験と、それを語ろうとする言語行為にはギャップがあるというものだ。体験や経験は第三者にとり観察可能なものであるが、語りとは、語り手のイメージ、感覚、感情、欲望、思想、意味などをもって成立するものである。（桜井 2002: 31-32）

⁴ 「結婚はしなくても子どもは持つつもりだった」と明言した人もいたが、それについては後述する。

⁵ 回答者の語りでは、配偶者を表す言葉として、夫、主人、旦那、パートナーなどが用いられていたが、本節では配偶者も含めて仲間、相手など幅広い意味をもつ用語としてパートナーを用いることとした。

参考文献

- 浅野富美枝、2010、「未婚、晩婚、非婚の何が問題かー希望する人生選択が可能な社会へ」、北九州市立男女共同参画センター”ムーブ”、『ジェンダー白書 7 KEKKON 結婚 女と男の諸事情』、明石書店、30-38。
- 井上輝子、2009、「日本の女性学と『性役割』」、天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納美紀代編、『新編 日本のフェミニズム 3 性役割』、岩波書店、1-37。
- 岩志和一郎、2010、「婚姻制度ーその枠組と問題点」、北九州市立男女共同参画センター”ムーブ”、『ジェンダー白書 7 KEKKON 結婚 女と男の諸事情』、明石書店、21-29。
- 江原由美子、2000、「母親たちのダブル・バインド」目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、29-46。
- 岡本英雄、2000、「日本型雇用慣行の変化と母親意識ー周辺化する女性労働力」、目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、131-148。
- スーザン・モラー・オーキン、2013、山根純佳・内藤準・久保田裕之訳、『正義・ジェンダー・家族』岩波書店。
- 落合恵美子、2004、『21世紀家族へ（第3版）』有斐閣。
- 香山リカ、2010、「結婚と女性の意思ー時代に振り回されないために」、北九州市立男女共同参画センター”ムーブ”、『ジェンダー白書 7 KEKKON 結婚 女と男の諸事情』、明石書店、90-93。
- 国立社会保障・人口問題研究所編、2014、「第5回全国家庭動向調査」、http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/NSFJ5_gaiyo.pdf（2014年10月3日アクセス）。
- 瀬地山角、2010、「結婚の「きしみ」を越えて」、北九州市立男女共同参画センター、『ジェンダー白書 7 KEKKON 結婚 女と男の諸事情』、明石書店、10-20。
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学ーライフストーリーの聞き方』、せりか書房。
- 少子化の社会・心理的要因に関する調査研究会（代表者 神宮英夫）、1997、「少子化の社会・心理的要因に関する調査研究報告書」
- 島直子、2012、「家族規範と結婚の変容」、松信ひろみ編著、『近代家族のゆらぎと新しい家族のかたち』、八千代出版、23-39。
- 竹内真純、2007、「夫のサポートが夫婦の結婚満足感を高める」、永井暁子・松田茂樹編、『対等な夫婦は幸せか』、勁草書房、77-94。
- 林郁、1985、『家庭内離婚』、筑摩書房。
- ウヴェ・フリック、2011、小田博志監訳、『質的研究入門（人間の科学）のための方法論』、春秋社。
- 裴智恵、2007、「共働きで夫はストレスがたまるのか」、永井暁子・松田茂樹編、『対等な夫婦は幸せか』、勁草書房、63-76。
- 直井道子、2000、「家意識と祖母の育児」目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、91-110。
- 永井暁子、2007、「対等な夫婦は幸せか」、永井暁子・松田茂樹編、『対等な夫婦は幸せか』、勁草書房、137-147。

- 中川まり、2010、「子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加」、『家族社会学研究』第22巻、第2号、201-212。
- 牧野カツコ、「2章 子育ての父母分担は世界いろいろ」、牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著、『国際比較にみる世界の家族と子育て』、ミネルヴァ書房、27-42。
- 松田茂樹、2013、『少子化論』、勁草書房。
- 松田智子、2000、「性別役割分業から見た夫婦関係」、善積京子編、『結婚とパートナー関係：問い直される夫婦』、ミネルヴァ書房、125-146。
- 松信ひろみ、2000、「就業女性にとっての職業と子育て－『子育てよりも仕事』は本当か?」、目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、149-168。
- ____、2002、「夫婦の勢力関係再考－勢力過程への着目とフェミニスト的視点の導入」、『新潟ジェンダー研究』、No.04、31-46。
- 円より子、1982、『主婦症候群』、文化出版局。
- 水落正明、2007、「夫婦間で仕事と家事の交換は可能か」、永井暁子・松田茂樹編、『対等な夫婦は幸せか』、勁草書房、47-61。
- 目黒依子、2000、「女性の高学歴化とジェンダー革命の可能性」、目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、9-25。
- 目黒依子・矢澤澄子、2000、編者前書き、目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、V-IX。
- 善積京子、1997、『(近代家族)を超える』、青木書店。
- 矢澤澄子、2000、「「母」の変容と女性の人生設計・自立の困難」、目黒依子・矢澤澄子編、『少子化時代のジェンダーと母親意識』、新曜社、171-193。

インタビュー項目（以下のような問いを軸にインタビューを行った）

1. 属性

年齢・職業・学歴・居住地・出身地

- ・ 夫・パートナー（年齢・職業・学歴）
- ・ 子ども（年齢・職業）
- ・ 親（同居／別居）

2. 結婚の経緯について

- ・ いつ、何歳で結婚しましたか。
- ・ お見合い結婚ですか、恋愛結婚ですか。
- ・ 婚姻届は出しましたか。いつ出しましたか。出して嬉しかったですか。
- ・ 結婚式はしましたか。したくてしましたか／仕方なくしましたか。嬉しかったですか。
- ・ 結婚に踏み切った理由はなんですか。

3. 結婚前：結婚の理想、イメージ・プランニングについて

結婚前にはどのような結婚生活、夫婦関係を理想としてイメージしていましたか。

例) ・ 家計握るのは誰だと考えていましたか。（かかあ天下？亭主関白？）

- ・ 子どもは産もうと思っていましたか。
- ・ 相手の両親とは同居／別居どちらだと考えていましたか。
- ・ ご自身の仕事はどうなると考えていましたか。

★ 一般的に「夫は仕事、妻は家庭」という夫婦の役割分担が言われていますが、それに対してどう思っていましたか。

4. 結婚後：結婚の現実（3の理想は現実どうなったのか？）

結婚後には結婚前の結婚生活、夫婦関係の理想はどうなりましたか。

例) ・ 家計握るのは誰になりましたか。（かかあ天下？亭主関白？）

- ・ 子どもは産みましたか（産む予定になっていきますか）。
- ・ 相手の両親とは同居／別居どちらになりましたか。
- ・ ご自身の仕事はどうなりましたか。

★ 性別役割分業はどうなりましたか。実際に結婚してから、夫婦の役割分担への考えは変わりましたか。

★ 「現実はこちらなった」ことに対してどう思っていますか。

4-1. 結婚して良かったことは何ですか。

例) ・ 社会的ステイタス

- ・ 子ども

- ・ 心の平穩
- ・ 経済的安定
- ・ 決定権（子ども有の人：子どもの進路、子どもの無い人：大きな買い物、等々）

★ 結婚で得た最大のものは何ですか。

4-2. 結婚して我慢していることは何ですか。

例) ・ 決定権がないこと

- ・ 仕事のないこと／職業キャリアの中断
- ・ 家事育児の負担の偏り
- ・ 自由時間や行動の自由がないこと
- ・ 姓を変えたこと
- ・ 夫や子どもに合わせなければならなくなったこと。
- ・ 友達づきあいが制限されること。

★ 「結婚しなければ良かった」と思うことはありましたか。それはどんな時ですか。

5. 「対等な夫婦関係」について

- ・ 夫婦は対等な関係ですか。対等かどうか気になりますか？
- ・ 「対等な夫婦」とはどういう関係だと思えますか？
- ・ 対等／対等でない、ならそれはどうしてですか。

4の質問の答えをフィードバックして再質問。

★ こう答えていらっしやいましたが、こうしてみると、最後にどう思いますか。

★ ふり返ってみれば、結婚はして良かったですか、しなくても良かったですか。